
英雄の後始末

吉田 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の後始末

【Nコード】

N7713W

【作者名】

吉田 匠

【あらすじ】

祖父の蔵で見つけた黒い本の中の魔法陣を興味本位で描いてしま
い異世界にやって来た誠治。

本当なら無双するほどの強さなのに何故か気苦労が絶えず……

1話 黒い本

8月も中旬を過ぎたが未だ暑さが緩まない日々。
が、此処はある山中にある道場。

早朝の為か暑いどころか肌寒い。

道場内は張り詰めた空気の中、青年が座禅を組み老人がその背後に
佇んでいる。

「……………」

「喝!!」

バキヤツ!!

「ぐおわぁー!!」

老人の手刀が青年の脳天に直撃し余りの激痛に転げ回る。

「邪念が出とるぞ」

「出るに決まってるだろ!!」

青年は涙目になりながらも老人に怒鳴りつける。

「休みのたびに人をこんな山奥まで連れて来やがって!! 本当なら
今頃京子ちゃんや香ちゃんの水着姿を拝みながらキヤツキヤツウフ
フしてたんだぞ!!」

血の涙を流さんばかりの叫びである。因みに京子、香は大学内でも
トップクラスの人気を誇る。

「ほっほっほっ。何も出来んへタレの癖にのう」
しかしそんな青年の叫びなど全く気にも止めない老人はカラカラと笑う。

「ぶっ殺す」

プチッとどこかの線が切れたのを自覚した青年が老人に襲い掛かる。

「遅いのう」

凄まじい速度で迫る青年だったが老人はあっさりと交わし右手首を掴むと床へ叩きつける。

「げはっ!!!」

受け身をとる事も出来ず身動き一つとれない。

「全く…感情に支配されてはいかんと散々言っただじゃろっ?」

「う…るせえ……糞爺い……」

「ほっほっほっ、減らず口が叩けるなら大丈夫じゃの。ほれ飯にするぞ」

「ちくしょー……」

青年の名は山上ヤマガミ 誠治セイジ。

都内の大学に通う21歳。

何故誠治が此処に居て何をしているのか説明しようと思う。

此処は誠治の祖父であり先程誠治を叩き伏せた老人、山上ヤマガミ 清十郎セイジユウロウ
の住居兼道場である。

休みになると清十郎は誠治を鍛えていた。

とは言っても誠治は好き好んで今の現状に居る分けではなかった。
最初は10歳の頃。

その頃はそれ程まだ抵抗もなく此処へ来ていた。言わば遊びの延長。

しかし年を重ねていくと誠治は嫌がった。それは無理もなく当初の
頃はまだ軽い鍛錬内容だったのだが、誠治の身体の成長と共に厳し
いものとなっていた。

朝から晩まで走らされたり熊とタイマンさせられたり……
そうなるとう然誠治は嫌になり逃げようとするのだがタダの一度も
逃げ切れなかった。

今回は特に誠治は捕まる分けにはいかなかった。

奇跡的に京子ちゃんと香ちゃん二人と旅行に行く約束を取り付け（
後一人男が一緒）れたのだ。

念密に清十郎から逃れる計画を建て全てが順調だった。

しかし浮かれ気分ですべての待ち合わせ場所に向かった誠治を待って
いたのは満面の笑顔の清十郎。

逃げる誠治追う清十郎。

抵抗する誠治拘束する清十郎。 哀れ誠治のパラダイスは無になった。

誠治は決して弱くない。

180はある身長に引き締まった身体。

大抵のスポーツや格闘技をこなす運動神経。

ただ相手が悪いのだ。
齡70になるが誠治は清十郎が息を切らしているのを見たことがない。
何度も組み手をしているが勝つどころかまともに攻撃が当たった事すらない。
噂だが一人でヤクザの組を壊滅したどころか外国の軍隊をも全滅したなんてのも。

ではそんな清十郎がどうして誠治を鍛えているのか？
そう問われた清十郎はただ一言、「いずれ分かる」とだけしか言わなかった。

「何が悲しくて俺は……………」

時刻は昼過ぎ。

珍しく出掛ける清十郎は誠治に蔵の掃除を言い渡した。
蔵の中は統一感のない物が所狭しと置かれている。

色彩豊かな民族衣装に妙なお面。西洋鎧があるかと思えば見たことの無い動物の剥製等々……………

清十郎は若い頃世界各国放浪の旅をしていたらしく消息不明になる事は日常茶飯事だった。

「たくつ、爺いなら爺いらしく掛け軸とかにしとけよ」
ぶつくさ文句を言う誠治だが手際よく掃除をしていく。

清十朗が居ないのだから逃げれば良いと思うだろうが、そんな事をすれば後に地獄がまつている。
ヘタレと言う無かれ、誰しも死にたくないのだ。

「お兄様!!」

「ん？飛鳥か。何だまた来たのか」
誠治に声を掛けたのは山上 飛鳥。
中学3年の15歳で誠治の妹だ。

「やっと夏期講習が終わりました、これからお兄様と一緒に居れます!!」

「お前も物好きだなあ」
飛鳥は誠治が此処へ連れて来られる度に後から着いてくる。

「物好きではありません!!私はお兄様と一緒に居たいんです!!」

「しかしなあ、此処にいたら折角の夏休みが満喫できないぞ?海と
か行きたいだろ」

「そう言うと思いますよ……………」
飛鳥は着ていたパーカーを脱ぎ捨てる。
そこにはビキニ姿の飛鳥。

「ぶっ!!」

「どうです?似合いますか?」

「似合う！！似合うから着ろ！！」落ちていたパーカーを拾い上げ投げる。

「もつと見て欲しいんですけど」

「頼むから着てくれ！！」

誠治の必死な懇願に渋々パーカーを着る飛鳥。
それにホツとする誠治。

飛鳥は美少女と言っても差し支えない容姿をしている。

街中では数え切れない程スカウトされている。

しかも15とは思えないスタイル。そこらのグラビアアイドルも裸足で逃げ出す程。

毎日クタクタになるま鍛錬をさせられている為性欲を発散出来ない誠治には目の毒だ。

しかも最近の飛鳥はやたらと誠治にスキンシップをしてくる。

いくら美少女とは言え妹。

まさに誠治にしてみれば別の鍛錬と言える。

「お兄様、これ何でしょう？」

二人で蔵の掃除を再開して暫く飛鳥が一冊の本を見つけた。

大きさは縦50センチ横30センチ厚さ5センチ。黒い革のような物で表装されているがタイトルも何も書かれていない。

「初めて見るな……」

十年近く前からこの蔵に出入りしている誠治だが初めて見る物だっ

た。

開いてみるが本の中は白紙だった。しかしパラパラ捲っていると1ページだけ何やら書いてある。

「異世界の行き方？」

そこには円形の図面が描かれており、図面の描き方や使う塗料等が事細かに書かれている。

「お爺様が書いたんでしょうか？」

「多分違つたら」

「ですよ」と飛鳥は首を傾げる。

清十郎がコレを書くのが想像出来ない。なら何故こんな物が此処にあるのか？

「まあいいか、サツサと終わらせよう」

「そうですねお兄様」

取り敢えず掃除を再開した二人。

しかし誠治は何故かその本が気になっていた。

夜。

飛鳥は泊まる事になり一緒に夕飯を取った。

飛鳥の料理の腕はかなりのもの。

清十郎と誠治はあまり料理が得意ではないので非常に満足した。

その後は誠治が入浴中飛鳥が間違つて？浴室に入ってくるハプニングはあつたものの何事もなく終わる。

二人それぞれ部屋に戻り後は寝るだけなのだが……

「何やってんだろな俺」誠治は自分の部屋の光景を見てポツリと咳いた。

部屋自体は6畳程でベットと机があるだけの殺風景なもの。

しかしフローリングの床には黄色のペンキで円形の図が描かれている。

ベットを縦に退かしあり直径約2メートルの円には文字らしきものが隙間なく書かれてある。

そうこれは昼間蔵で見つけた黒い本に描いてあつた図だった。

本は蔵に置いてきた誠治だったが何故か気になり夕飯後取りに戻つたのだ。

そしていつの間にか一心不乱に図を床に描いていた。

「2時か……」

携帯で時刻を確認した誠治は円の中心に座り暫し空を眺める。

（何でこんなもん書いたんだ俺は？）

誠治はアニメも漫画も見るがそれほど夢中に見てる分けではない。

だから異世界と言われても正直ピンとこない。

明日は早朝から修練なので早く寝るべきなのだ。なのにこの図を描かずにはいられなかった。

しかも描き終わったのに何も起こる様子がない。

「寝るか……」

言いようもない疲労感にグッタリしながら立ち上がる。

すると描いた図が淡い光を発し出す。段々光は強くなり誠治の目の前が真っ白になる。

「ちよ！？タンマー！！」

その頃飛鳥は気配を消しながら兄である誠治の部屋を目指していた。

ピンクのネグリジエを着ているのだが薄く透けていて白い上下の下着が見える。

今日飛鳥はある決意を胸に此処へ来ていた。それは兄、誠治に愛の告白をする事。

兄妹の愛は禁忌、^{タブー}許されるものではない。

しかし飛鳥に躊躇いはなかった。

幼少の頃から憧れだった誠治。何時しかそれは好意になり愛情になった。

とは言えその相手が兄である以上世間から祝福されるものではない。

なのだが先日15歳の誕生日を迎えた飛鳥は両親からある事実を聞く。

それは両親同士が再婚であり誠治と飛鳥は連れ子なのだ。

つまり誠治と飛鳥は血の繋がった兄妹ではなかった。

飛鳥はその場で号泣した。

両親はシヨックの為だと思ったが実はそうではなく歓喜の涙だった。叶わないと諦めていた想い、それが諦めなくて良いと解った飛鳥は

今日身も心も誠治に捧げる決意をした。
本当なら偶然を装って誠治の入浴中に乱入し最後まで事を成す予定
だったが逃げられたのだ。

「お兄様今度は逃がしませんよ」

子兔を狙う狼のような雰囲気を出しながら誠治の部屋のドアノブを
握り一気に開ける。

「お兄様愛しています！！どうか私を抱いて下さい……………」

しかし其処には誠治は居らず床に妙な図が描かれているだけだった。

「お兄様何処へ……………」

それから一晩中誠治を探す飛鳥だったが一向に見つからなかった。

2話 いきなり見捨てられる

「マジか……………」

誠治は啞然としながら呟いた。

自分の部屋に描いた図が光り出し眩しさに目を瞑り暫くして開けると其処は森だった。

見上げる程高い木々に日光は遮られ辺りは薄暗く足元は積もった落ち葉で柔らかい。

「まずは……………落ち着こう」

一回二回と深呼吸。

「よし、現状確認といくか」

まず辺りを見渡す。

森なのは解るが道場の近くではない。

自分の服装はTシャツに短パン、サンダル。ポケットにはマジックペンにタオルだけ。

そして足元に落ちている黒い本を拾う。

「やっぱり異世界なのか……………」

この本に書いてあった異世界へ行く方法。

興味本位で描いてみたらこんな事になってしまった。

ふと、誠治は疑問に思う。

何故自分はこんな事をしたのか？

あの円形の図、魔法陣のような物を描くのに4時間以上費やした。

誠治は漫画もライトノベルも読む。だからと言ってそれほど熱心な訳ではない。

異世界に行きたいと切に願う歳でもない。

なのに魔法陣を描いている時は止めようとは思わなかった。

「まあそんな事考えても仕方ないか。本当に異世界とは限らないし今の段階では此処が異世界とはまだ断定出来る要素がない。

ひよっとすると此処は地球の何処かである魔法陣は何か転移装置かも知れない。

それはそれで常識外だが。

誠治は取り敢えず歩き出す。

此処が地球にしる異世界にしるまず人と会う必要があった。

暫く歩くと人影が見える。

後ろ姿だが女性なのは解った。

腰まで届く赤いおさげ髪。服自体は何の変哲もない物だが何か革のような物で胸や脛辺りを覆っている。背中には槍を背負い腰のベルト部分に数本のナイフを差している。

「取り敢えず日本じゃなさそうだ」

あの格好は狩りをしていると推測出来るし日本ではまず捕まる。

「あのすんません」

誠治は極力声のトーンを抑え両手を上げながら声を掛ける。うっかりバツサリとやられては堪らない。

「誰!？」

返ってきた言葉は意外にも日本語だった。

女性は素早く反転すると槍を構え誠治を睨みつける。

「迷ってしまったんだ、近くの町か村の場所を教えてほしい」

「グルダの森で迷った？しかもそんな格好で？」

女性は怪訝そうにする。

それも当然で誠治の格好は近所のコンビニに行く程度の軽装だ。

「途中で荷物を盗まれてね」

誠治は適当な嘘をついた。

勿論本当の事は言える筈もない。

「……………ふ〜ん。怪しいけど悪い奴じゃなさそうね」

女性は構えを解く。

誠治を信用した訳ではないようだが争う気はないと判断したようだ。

「彼処へ行けばルサカへ着くわ」

右側を槍で示す。

「ん、どうも」

サッサと行けと言わんばかりの態度だがそんな事を気にしてもしょうがないので誠治は歩き出す。

「待った!!」

そんな時突然呼び止められる。

その声は切羽詰まったよう。

「何だ……………」

振り向き誠治は固まる。

其処に居たは熊だった。

だが普通の熊なら誠治は何度も狩っているので今更驚かない。しかし其処に居たのは全長5メートルを越え全身真っ赤な熊らしき生き物。上顎からは鋭い牙が1メートルは伸びている。少なくとも誠治はこんな生き物を知らない。

「まさかこんな所でコイツに遭遇するなんてね」
いつの間にか女性は誠治の隣まで来ていた。

「コイツは？」

「討伐ランクBのグルベアー」

「強いのか？」

「正直一人じゃ逃げるのもキツイわね」
女性の頬を伝って汗が落ちる。

「あなた闘える？」

「まあそこそこ」

清十郎には未だに勝てない誠治だが彼以外なら何とかする自負はある。

しかしあれがどれほど強さか解らない為任せるとまでは言えない。

「じゃあ同時に攻撃を仕掛けて相手が怯んだ隙に逃げるわよ」

「解った」

女性の提案を了承し誠治は腰を落とし構え呼吸を整える。

「良い？1、2、3…今！！」

合図と共にグルベアーに踏み込む誠治と踵を返し走り出す女性。

「って何処行く!?!」

「ゴメーン 一人じゃ無理だけど囷が居れば逃げれるから。じゃー
ねー」

ウインク一つし、あつと言つ間居なくなる女性。

「会ったばかりの相手を囷にすんじゃねえー!!」
誠治の絶叫が虚しく森中に響いた。

3話 異世界の実感

森の中を颯爽と駆ける女性。

「あの人には悪い事したわ」

そう言いつつ言葉に悪気が全く感じられない。

「ま、私は運が良くてあの人は運が悪かったってだけね」

たかが運されど運。

例えどんな強力な力を持った猛者でも当たり前所が悪ければ死ぬし、病気もそう。

生き残る為に必要なのは運と言うのが女性の持論だ。

「まだまだ私はツイてるわね」

とても愉快そうに微笑んだ。

一方その頃来たくもない異世界に来て其処で初めて会った女性に囁にされた誠治はグルベアーと対峙していた。

「おかしいな…め〇ま〇テレビだと蟹座の運勢は2位だったんだが待てよ、するとアイツは蠍座か？」

そんな事を考えてながらグルベアーを観察する。

グルベアーは誠治を獲物と認識したようで涎を大量に垂らしている。

「旨くないぞあゝ」

「グルアア！！」

突如グルベアーが誠治に襲いかかってくる。

「速い！！」

素早く左へ交わし距離を取る。

「グルル……………」

グルベアーはイラついたように唸り誠治を睨みつける。

「成る程……」

誠治はグルベアーの能力の目安をつける。

知っている熊より動きは早い、大体だが1・5倍程。

「グルアアア！！」

雄叫びを上げ再び襲いかかってくるグルベアー。

四本脚で迫り前脚を振るう。

かなり余裕を持って避けた誠治だったが風圧で頬が浅く切れる。

「痛！！力も強いな」

傷から流れた血を指で拭い呟く。

誠治は何度も熊と相対してきた。

しかしこの妙な熊、グルベアーは比較にならない程強い。

「全力で行く」

誠治は呼吸を整え始める。

誠治が清十郎から教わってきた事の大半が基礎体力の向上と『氣』である。
漫画などで有名な氣だが実際にもある。とは言えそれを飛ばしたり空を飛んだり出来る訳ではない。
基礎能力の底上げが出来る程度で今の誠治では精々1・2倍向上させるので精一杯なのである。

誠治の身体が温かくなる。氣が全身を循環している証拠だ。

「よし!!」

グルベアーに向け駆け出す。

(何!?)

誠治は違和感を感じる。

異様に身体が軽いのだ。

感覚として1・2倍等ではなく軽く2倍以上ある。

しかし動きを止める訳にもいかない。

グルベアーまで一気に接近しジャンプする。狙いは眉間。

そこへ攻撃し怯ませる。

倒そうとは思っていない。逃げるまでの時間が稼げればいい。

氣を右手に集中させる。

「柔……波弾!!」

清十郎から教わった唯一の技。

『柔波弾』。

氣を用い波状の衝撃を相手に打ち込む。

外傷を与える技ではなく内、つまり内蔵にダメージを加える。

上手く行けばグルベアーは脳震とうを起こし暫くの間動けなくなる。

が、予想外の事が起こる。

パーン！！

攻撃は命中したのだがグルベアーは脳震とうを起こす所か頭部分が吹き飛んだ。

「は？」

啞然とする誠治を余所にグルベアーはユツクリと倒れピクリともしない。

(氣の威力が段違いに高い……………)

誠治は自分のした事に戸惑う。

こんな事は清十郎なら出来るかも知れないが誠治にはまだ無理な事。

「異世界……………だからか？」

それぐらいしか理由が思い浮かばない。

「まあ、今は」

誠治は頭の無いグルベアーに手を合わせる。

「済まんな」

運の無いグルベアーに誠治は謝った。

4話 女性に歳を聞くのは禁句です

「見えた」

ようやく森を抜けるとそれを確認出来た。

5メートルはある石材の壁。

近づくと入り口の門が見える。

恐らく彼処があの女性が言っていたルサカだろう。

中に入りたかったが誠治は自分の姿を改めて見る。

グルベアーとの闘いのせいで服は汚れ所々破けている。右手に黒い本、左手にグルベアーの牙二本。

此処が異世界だと確信した誠治はまず金の心配をした。

元の世界に戻るにしても直ぐには無理だろう、なら生き延びる為には金が必須。

あの女性がグルベアーの事を討伐ランクBと言っていたのを思い出したのだ。

某狩猟ゲームや異世界系小説にはギルドと呼ばれる組織が描かれている。そのギルドで討伐した動物の採取部位を売る事が出来ていた。

ならこのグルベアーの牙も売れるのではないかと判断したのだ。

が、いくら何でもこの格好は怪しすぎる。

門の両横には門兵らしき人がある。

誠治自身が門兵でも今の自分ではまず街の中には入れないし通行料がいるかも知れない。

「うーむ……」

「何してるの？」

「うわぁっと!?!」

さてどうするかと誠治が考えていると不意に背後から掛けられた声に飛び退く。

其処に居たのは女性、いや少女か。

黒髪を肩の辺りで切りそろえている。あどけない顔立ちは可愛らしく中学生位に見える。服装はフード付きの白いローブ。誠治の頭には某有名RPGの白魔導師思い浮かんだ。

「大袈裟じゃない？」

少女は呆れたように肩を竦めた。

「それに随分な格好ね、何かあったの？」

「え〜と、田舎から出て来たんですけど荷物を盗まれましたっていうかと悩んでいて」

言葉の内容自体はおかしくないが明らかに動揺してしまっていた。

これは疑われると相手の様子を伺うと、少女はガシッと誠治の両手を握り締める。

「大変だったね……」

「へ？」

「大丈夫よ!!何があったかなんてもう聞かないから……頑張って生きて行けば絶対良い事あるから!!」

少女は目を潤ませながら力説する。
どうやら少女の中で誠治は故郷を何らかの事情で追い出された可哀
想な身の上になっていようだ。

「ど、どうも…」

誠治は否定するの何だし、少女の迫力に押され頷くしかなかった。

(しかし何処の世界も良い奴と悪い奴もいるもんだ…)

この世界に来ていきなり囿にされたと思いきやこうして身も知らない男に心底同情している少女を見ると、どっちの世界もあまり変わらないと誠治は少し安心した。

「ありがとつな、えつと名前は？」

「あっ！？自己紹介もしてないのにゴメンね。私はルケア」
ルケアはニッコリと微笑み名前を言った。

「俺は山上 誠治。セイジだ、よろしく」

「うん！よろしくセイジ」

二人は笑い合つと握手をする。誠治の方が背が高い為屈んでだが。

「で、ルケアの保護者は何処だ？」

誠治は周りを見渡す。

ルケアのような少女が一人で居るにはこの森は危険だ。
なら保護者が居る筈だと探すのだがそれらしき者は見当たらない。

「私一人ですけど？」

「え！？ダメじゃないか一人なんて危ない！！」
何せさっきのグルベアーがいるような森だ誠治は大丈夫だったがこの少女が一人でどうか出来るとはとても思えない。

「……………私幾つに見えますか？」
若干ルケアの声が震えている。

「そつだな……………14、5歳かな？」

「……………24です」

「……………はい？」

「だから私は24歳なんです」
誠治は頭を傾げるが直ぐにうんうん頷きルケアの頭をポンポンと叩く。

「またまた、どう見ても14、5歳だぞ？本当は幾つなんだ？ひよつとしたら10歳とかか？まあ幼く見られたくないってのは解るがな」

「……………」
ルケアは無言のまま誠治から離れ背負っていたバッグから弓を取り出し構える。

「あの…ルケアさん？」
言いようのない殺気に誠治の背中に冷たい汗が流れる。

「私は歳の事だからかわれるのが一番許せないんです……………」

「ちょ！タンマ！？」

それから暫くの間誠治は降り注ぐ矢を死に物狂いに避け続けた。

5話 ギルド登録

「ここがルカサか」

誠治は目の前に広がる風景に感嘆とする。

石畳の道には馬車を通り、煉瓦造りの家々が連なる。通行人の髪は黒、赤、蒼、緑と鮮やかで耳が尖っていたり羽が生えていたり明らかに人間でないのも居る。

異世界。まさにその一言に尽きる。

「で、何時までむくれてるんです？」

「……………いいんです、どうせ私は見た目も中身も子供ですよー」

隣を歩くのはルケア。

ルケアの放った矢の雨を何とか避けきった誠治はルケアに謝り許して貰った。

ルサカの街に入る時に案の定門兵に変な目で見られた誠治だったがルケアがその門兵と知り合いだったらしく何事もなく済んだ。のだがまだルケアの機嫌は直っておらず頬を膨らませて黙っている。その姿が余計に子供っぽく見えるのだが勿論そんな事言えない。

「機嫌直してよルケア姉さん」

「え？」

「あ、いや俺より年上だから…」

軽率だったかと誠治は思ったがルケアは先程までの不機嫌顔から一転して笑顔になる。

「うふふ…姉さんか。そうよ私はお姉さんよ！さあ弟よ行くわよ！」
と、駆け足で先に行ってしまう。
その姿がまた子供っぽいのだが。

二人はある建物の前に居た。

誠治はルケアにグルベアーの牙を売る場所はあるかと尋ねるとやはりと言うかギルドはあり、其処で売ればいいという話になった。

そこで二人はギルドまで来ていた。

赤い煉瓦造りで三階建て。

ルケアによれば一階は仕事の依頼関係全般で二階はギルドへの登録や解除などの事務中心、三階は解らず関係者以外立ち入り禁止なのだそうだ。

グルベアーの牙を売るのは一階だが、先にギルドに登録してからの方が高く買い取ってくれるそうなので二人は二階に上がった。

人でごった返し騒がしかった一階に比べ二階は話し声がするだけで元の世界の役所を思い出させた。

「登録お願い出来ます？」

ルケアは受付らしき場所に座っている女性に話しかける。

「はい、あらルケア？」眼鏡を掛けた女性がルケアを見て少し驚いている。

「とつとつ冒険者止めるの?」

「や・め・な・い。くだらない事言っでないでこの子の登録をお願い
い」

ルケアに促され誠治は前に出る。

「へえ、やっと男が出来たのね」

「違うわよ!!」

そう言われたルケアは顔を真つ赤にし机に身を乗り出す。

「照れなくていいのよ。お姉さん安心したわ」

「あんた年下でしょうが!!」

「待たせてご免なさいね、手続きしましょうか」

喚くルケアを余所に数枚の紙を取り出し机の上に広げる。

「ナナあなたね!？」

「はいはい何時まで取り乱してんの。からかっただけよ」

「う〜…」

「子供じゃないってんなら年相応に落ち着いたら?」

「ふんだ!!セイジ終わったら一階に来なさいよ!!」

ルケアは言い返せないのかドストド歩きながら下へ降りて行った。

「で、あなた本当にルケアのいい人じゃないの？」

「違いますよ、今日会ったばかりですし」

「残念。男でも居ればあの子少しは大人っぽくなるだろうけどね」

「ルケア……さんと知り合いなんですか？」

「ええ、幼なじみよ。ちなみに私の方が一つ年下」と、軽くウインクする。

セイジも思わずドキッとするぐらい色っぽさ。

(まあルケアも怒りたくなるわな)
ルケアに同情する誠治だった。

「では改めて、私はギルド職員ナナ・クレパス。ようこそ我がギルドへ」

さっきまでのいたずらっ子のような顔つきとは打って変わりキリッとした表情は有能なキャリアウーマンのようだ。

「ご用件は登録でよろしいですか？」

「は、はい」

「ではこちらにご記入お願いします。名前以外は書いても書かなくてもよろしいので」

妙に迫力のあるナナに戸惑いながら差し出された紙を見る。

「あれ？」

「どうかなさいましたか？」

「あー…何でもありません」

そう言うものの誠治はその紙に書かれている文字に驚いていた。そこに書かれている文字は日本語だった。

何故？と誠治は混乱していた。

言葉通じるのは百歩譲ってまだいい。しかし文字まで日本語なのは流石に違和感しかない。

だからと言ってナナに何でこの文字なのかと聞く事は出来ない。

誠治は自分が異世界から来たのを出きるだけ隠しておきたかった。

頭がおかしいと言われるだけならまだいい。

この世界の常識や宗教がどうなっているか、解らないが下手をすれば異端とされ捕まり処刑されないととも言えない。

つまり現状では何も出来ないという事。

紙には書く欄が幾つかあったが名前だけ書く事にした。

何か言われるかと気が気でない誠治だったがナナは受け取った紙を見ても特にアクションはしなかった。恐らく何かしらの事情で書けない人達がいるのだろうと判断し安堵した。

「ではこのギルドの説明をさせて頂きます。まずランクがあり上からSS、S、A、B、C、D、Eの7段階あり受けれる待遇に違いがあり上のランクの依頼ほど高い報酬を得られます。尚、請けれる依頼は同ランクの物か下のランクのみとなります。ある程度数の依頼を達成されますとランク昇級試験が請けれます」

ナナは銀色の受け皿を取り出し、その上に指輪を置く。

「これがギルドに登録した証です。依頼を請ける時や達成の報告、素材の売却時には提示して下さい」

誠治はその指輪を取り観察する。

何かの金属製で色は黒。これと言った特色はない。

「今セイジ様はランクEなので色は黒ですが、ランクが上がる度に色が変わっていきます。後何かご質問は？」

「そうですね…無くすとどうなります？」

「紛失の場合は30万キユエルで新しい物をご用意します」

「なるほど」

と、言いつつ30万キユエルがどれほどの価値か分からない。

(まあそれはこれから知ってくしかないか)

「ありがとうございます」

誠治は指輪をポケットに突っ込むと立ち上がる。

「あ、それからこれは個人的なお願いなんだけど…」

「はい？」

「ルケアをお願い、あの子危なっかしくて」

「出来る事はしますよ」

ナナの心配顔に誠治は微笑んで答えた。

一階でルケアと合流した誠治はグルベアーの牙を売却した。
値段は二本で150万キユエル。
本来なら200万キユエルしてもいいのだが、ヒビが数ヶ所あるためにこの値段になった。

「いい無くしちゃ駄目よ？」

「分かってるって」
さっきからのルケアに誠治は苦笑いしている。
やはり150万キユエルは大金らしくルケアが心配しているのだ。
渡されたのは計6枚の硬貨。
500円玉程の大きさで銀色の円形硬貨が5枚。それより倍程の大きさで薄い金色の五角形硬貨が1枚。どうやら円形硬貨が1枚10万キユエルで五角形硬貨が1枚100万キユエルのように紙幣はないようだ。

「私は用事があるから一緒に行けないけど大丈夫？」

「何とかなるよ」

これから誠治はこのお金で冒険者の装備を整えるべく買い物に行くのだがルケアはどうしても外せない用事があるようだ。

「いい？終わったら私の所に来るのよ」

「分かったって」

「絶対よ！絶対来なさいよ！」

ルケアは何度も振り返りながら走っていった」

「やれやれ……」

そんなルケアを眺めながら誠治は溜め息を吐く。

この世界に来てまだ1日と経っていないのに色々な事があった。

勿論元の世界に帰るのが目的だが直ぐには無理。ならそれまでこの世界で生きて行かなくてはならない、もしかすると一生。

「まあ今はまだいいか……」

誠治は自分に言い聞かせるように呟く。

先の事は誰にも解らない。なら今を生きるしかないのだ。

「さてと」

誠治は街中へ歩き出した。

6話 パーティー結成

買い物を終えた誠治はルケアの居る宿屋に来ていた。

誠治の姿はすっかり変わっていた。

グレーの長袖長ズボンに革のブーツ、脛当て、胸当て。拳部分に金屬が付いている籠手。テント生地のようなもので出来たリュックを背負い中にはこの世界に来ることの切欠になった黒い本とマジックペンを入れている。そしてギルドの指輪は紐を通し首から下げている。

総額52万キュエル。その内防具一式が50万キュエルになる。

少々高いかと思つた誠治だったが、冒険者と言う命懸けの仕事をする以上装備をケチりたくはなかつたのだ。

そんな事で今の姿形だけで言えば冒険者として違和感はなかつた。

開けっ放しになっている入り口から中を覗き見る。

ルケアからは宿屋と聞いていたがテーブル席が幾つかありカウンターの棚には酒瓶が並んでいる。どうやら一階は酒場になっているようだ。

「それってクビって事!？」

店内中に響く大声に誠治はその方向を見やる。

其処には男女一組がテーブルに付いておりその中にルケアがいた。ルケアは怒りの表情で立ち上がりテーブルをバンバン叩いていた。

「そう取つて貰つても構わない。悪いがこれ以上君とパーティーは組めない」と皆が言っているのですね」

そんなルケアに冷ややかに言い放つ男。

4、50歳位で痩せているが眼光鋭い。例えれば鷹のよう。

「だからって……あっ!?!?」

その時ルケアと目が合う。

何故か誠治は不味いと思い逃げようとするが素早くルケアに腕を掴まれてしまう。

「セイジちょっと来て!!」

グイグイと引っ張られ隣に座らされる。

「えっと、ルケア姉さん俺にどうしろと?」

「弁護して」

「んな無茶な……」

(今日会った人の何を弁護しろと?)

「この方は?」

セイジがぼんやりとそんな事を考えていると男が話しかけてくる。

「えーセイジです。ルケアとは今日会ったばかりの知り合いです」

「ひょっとして冒険者ですか?」

「ええ、なりたてですが」

「そうですか。私は冒険者グループ『銀龍』の代表ガルド・ファレンと申します」

「セイジ・ヤマガミです。で、冒険者グループと言つのは?」

「冒険者グループと言つのはギルドに登録している冒険者らがお互

いを協力しあう集まりです」

ガルドはコップの水を一口飲む。

「依頼は様々な種類があり、またそれに対応する能力が必要になります。討伐系には戦闘力、採取系には知識等。しかし個人のパーティーは5人までと規定があるのでそれも限界があります。しかし冒険者グループに入っていれば依頼毎に必要な能力を持った冒険者達を派遣しより確実に依頼を完遂出来ます」

「へえ」

人材派遣会社みたいなものと誠治は解釈する。

『銀龍』のようなグループは幾つもあり冒険者の殆どが入っている必要不可欠な物。

「セイジさん、よろしければ『銀龍』に入りませんか？」

「お金は要ります？」

「ええ、最初に1万キユエルで依頼達成時に報酬から20%頂きます」

高いとも思えるが負担は減るしその分多く依頼を請けられる。その事を考えれば悪くない。

「ちょっと何勝手に勧誘してるのよ!!」

そんな考えをルケアの声が寸断する。

「私達は常に有能な冒険者を探していますから」

「セイジは冒険者になったばかりって言うたでしょう!!」

「落ち着いてルケア姉さん。それでガルドさん、さつきルケア姉さんがクビがどうやら言っていました。が何かあったんですか？」
このままでは話が全く進まないと判断しルケアを落ち着かせガルドに話を振る。

「ルケア様は『銀龍』に所属して居られるのですが他の冒険者方からの苦情が絶えないのです。例えば……」
ガルドは懐から紙を取り出す。

「『後方援護の弓で殺されそうになった』、『採取の際目的の物をずっと足で踏みつけていた』、『容姿の事を言われ暴れる』、『保存食を腐らす』等々……」

「ルケア姉さん全部本当の事？」

「……………てへ」

「敗訴です」

「そんなあっさり!?!」

「だって不味いだろこれ……」
冒険者は死と隣り合わせの危険な仕事で一つのミスが死へと繋がってしまう。

正直誠治でもルケアと組みたくない。

「我々も余り冒険者同士のいざこざに関わらないのですが流石にこの様な事が頻繁に起きては信用に関わるので」
ガルドも疲れたように言う。

「もういいわよー！そんなに辞めさせたいなら辞めてやるわよー！
そう言い放ち誠治の肩に手を置く。」

「セイジとパーティー組むからー！」

「……………はい？」

「了承して頂いて有難う御座います。ではこれで」

「ちょい待てよアンタ！？何ホツとして立ち去ろうとしてんだよ！
？」

事の重大さに気付いた誠治がそそくさと居なくなるうとするガルド
を呼び止める。

「セイジさん冒険者は生き残る事が第一です。生き残って下さい」
振り向き憐れみの籠もった目を言い、居なくなった。

「セイジー！今日から私達新生パーティーの始まりよー！」

「……………寝たい」

目を輝かせ宣言するルケアを余所に誠治は心身の共にグッタリとし
ていた。

閑話 兄を訪ねて…

誠治が深い眠りに着いた頃。

日本は夏の猛暑が悪あがきの如く猛威を振るっていた。

「此処にも居ない……」

此処海水浴を茫然と眺める一人の美少女、山上 飛鳥である。

異世界に行ってしまった誠治だがその事を知る由もない飛鳥は彼方此方を探していた。

海水浴場に来たのには理由があつた。

この夏、清十郎に連れ去られるまで誠治は大学の友人達と海に旅行する予定であつた。

飛鳥はその事を誠治から聞いていた、と言うよりその情報を清十郎へ流したのは飛鳥である。

誠治は清十郎には旅行を隠していたが飛鳥には普通に話していた。まさか妹から清十郎に情報が流れるとは思わなかつたのだ。飛鳥にしてみれば愛しき兄が他の女と旅行に行くなど許容出来るはずがなかつた。

そんなわけでまだ誠治が居なくなつて1日と経つて居ないため当初予定していた旅行先は流石に無いと判断し、ならばと海に来ていた。だが当然の如く誠治の姿は見えない。

「はあ……」

溜め息を吐き落胆する姿に見とれる男二人組。

「良いなあの子、声掛けようぜ」

「止めとけよ」

「んだよう」

「あの子の後ろ見て見るよ」

「後ろ? ……げっ!？」思わず青ざめる。

飛鳥の後ろには哀れなナンパ男の骸が山積みになっている。

死体ではありません。

「何だありゃ!？」

「あの子がやったんだよ」

幼い頃から誠治に付いて回っていた飛鳥も清十郎に鍛えられて来た。

何でもこなす飛鳥だが、武術に関しては天才だった。

14歳の頃に清十郎からお墨付きを貰った程である。(因みに誠治はまだ)

飛鳥を本気でどうにかしたければ5人以上の達人クラスを用意しなくてはならない。少なくとも軽薄ナンパ野郎がダース単位居ても何の役にもたたない。

「今度はお兄様がよく卑猥なDVDを買うお店を探しますか…」
飛鳥放浪の旅はこの後二週間続いた。

7話 魔法球

翌朝。

朝の日差しに起こされた誠治。

頭はボーとし体は怠い。

昨日は濃すぎる1日だったせいかまだ心身共に回復していない。

「起きるか…」

本当ならこのまま惰眠を貪っていたい誠治だがそんな暇はない。まだ100万キユエル弱のお金のあるうちに冒険者の仕事に慣れなくてはならない。

何せどの位か解らないがこの世界で生きていかなければならないから。

宿になっている二階から一階に降りルケアと合流。
朝食を食べながら今後の事を話し合う。

「まずギルドに行つて…あ、落ちた」

床に落ちたパンをサツと拾い上げ口に放り込む。

「……………」

「それで簡単な依頼を請けて…あー！！スープが袖に付いてる！？もうー！！」

ビシャビシャになった袖をギュツと絞り布で拭くルケア。

「……………」
そんな騒がしいルケアを見ていて誠治は一つ解った事がある。
ルケアは雑なのだ。

食べ物ポロポロと落とすはコップは倒すわでテーブル上は酷い有り様になっている。

雑であり不注意な性格。

その性格が冒険者グループ『銀龍』をクビになった根本の理由なのだろう。

流れとは言えパーティーを組んだ以上ルケアを見捨てる気はない誠治だが何とかその性格を直すようにこれから言うて行くつもりだ。

「ねえ聞いて…あつ」

ルケアの手からフォークがすっぽ抜け誠治の頬を掠める。

「ゴメンね〜」

「ははは…」

そう、何とかしなければ自分の命が危ないのだから。

「やつほー！！ナナ」

「そんな大声上げなくても聞こえるわよ」

朝食を終えた二人は早速ギルドに来ていた。

昨日喧嘩して別れたルケアとナナだが今は普通に話している。幼なじみの二人にしてみればあんなのは日常茶飯事であった。

「どうしたの？やけにテンション高いわね」

「私、セイジと組んだの！！」

「セイジ君とパーティー組むの？」

「ええ、セイジは初心者だからね。お姉さんが面倒見てあげないと胸（無い）を張り堂々と言いつルケア。ナナはセイジを手招きし声を潜める。

（お願いはしたけどパーティーを組む必要は無いのよ？）

（俺もそのつもりはなかったんですが流れで…）

「ルケア、セイジ君に迷惑掛けちゃ駄目よ？」

「そんな事しないわよ」

何言ってるの？と言わんばかりのルケアにナナはこれ以上この事は言わない事にした。

機嫌を損なうと面倒なのは解っているからだ。

「そうそうセイジ君魔法球渡すの忘れてたわ」

そう言っつてテニスボール程のガラス玉のような物を3つ取り出す。

「何ですこれ？」

セイジはそれを手に取る。

よく見ると玉の中心が白く光っている。

「知らないのセイジ？じゃあ私が……………」

「ルケア、それ私の仕事だから」

「あはは、ついね」

「全く……………で、これは魔法球と言って魔法が入っている物なの」

「魔法！？魔法があるんですか！？」

「どうしたのそんなに驚いて？」

「セイジ？」

セイジの驚きようにナナとルケアがポカンとする。

（しまった！？）

セイジは自分の失態に動揺する。

余計な厄介事を避ける為には異世界から来た事は絶対隠さなければ
ならない。

魔法があると言うのはこの世界では常識なのだ。

その常識で驚くのは明らかにおかしい。

「あつと…自分の故郷はかなりの田舎でして」

「そう…まあ中々魔法を使える人は少ないから知らないのも無理な
いかもね」

「しょうがないわね。じゃあやっぱり私が説明……………」

「私がするからルケア」

「そう?」

事なきを得て誠治はホツとする。

ナナとルケアを信用しない訳ではないがどこから話が漏れるか解らない為用心するに越したことはない。

「魔法を行使するには魔力が必要で魔力は多かれ少なかれ誰でも持つてるの。でも魔力を火とか水とかの魔法として具現化出来る人は少ないの。魔法は便利で冒険者にとっては必要不可欠でも使える人は少ない、なら誰にでも使える道具があればいいと言う事で出来たのがこの魔法球なの」

「この中に魔法が…」

「そう、但し一回だけの使い切り。空になった魔法球は透明になるからギルドに持ってくれば魔法を充填できるわ」

「お金はどの位で?」

「これが一覧よ」

ナナから紙を受け取り見る。

回復(小)	2000キユエル
回復(中)	4000キユエル
回復(大)	6000キユエル
解毒(弱)	2000キユエル
解毒(強)	5000キユエル
鎮痛(弱)	1000キユエル

鎮痛（強） 4000キユエル

治癒 50万キユエル

開錠 10000キユエル

火球（小） 2万キユエル

火球（中） 5万キユエル

火球（大） 10万キユエル

水球（小） 5000キユエル

水球（中） 5万キユエル

水球（大） 10万キユエル
□

「治癒が抜けて高いですね」

「治癒は大抵の病気や怪我なら直ぐに治るから。回復は疲労を回復するだけだからこの値段。水球（小）は攻撃用じゃなくて飲み水用、大樽一個分の水が出るわ」

「なるほど」

「覚えていて欲しいのは開錠を犯罪に使ったらこれだから」と、ナナは首をトントンと叩く。

「勿論しません」

何事もないように言うナナに誠治は背筋を正す。

魔法球は強力で便利だけに犯罪での使用には罰則がかなり厳しい。逃げてモギルドが高額の懸賞金を掛けるので大概捕まる。ギルドの信用問題にも関わるからだ。

「この一覧以外の魔法もあるからその時は直接聞いてね」

「はい。でもそんな物を貰っても良いんですか？」

「それは支給品。中は回復（小）が2つと解毒（弱）が1つ。3つ以上欲しかったら販売もしてるわ」

「因みに1ついくらですか？」

「100万だけど誰にもって訳じゃなくてギルドが了承しないと売らないの」強力だけにお金だけで大量に所持されては困るからだ。

「そう言えばルケア姉さんは魔法球に何を入れてるの？」

「回復（小）回復（中）火球（中）ね」

「へえ…火球（中）を持つてるんだ？」

「これで魔物一掃したら気持ち良さそうだから」

「へ、へえ…」

赤い光を灯す魔法球を持ちブンブンと腕を振るルケアを見て顔をひきつらせる誠治だった。

グルダの森。

誠治とルケアはギルドで依頼を1つ請けた。

『バルバル草5束採取。』

報酬2000キユエル。

受諾可能ランクE。』

バルバル草は胃薬に使われる薬草。

森の中まで行かなくても採取出来るのでランクは一番下。受諾可能ランクは1人ならそのままパーティーの場合は過半数を締めるランクになる。

例えば5人の場合Bランク3人にCクラス2人ならBランクに。Aランク2人、Bランク2人、Dランク1人ならAランクとBランクが同数の場合低い方のBランクになる。

誠治はEランクでルケアはDランク。その為Eランクの依頼しか請けない。

「どう、あった？」

「これ？」

「うんそれ」

最低ランクの依頼だけに1時間も経たない内に5束を集め終わる。

懸念していたルケアの失敗は無く誠治は安心した所で思い出す。

「そう言えば魔法球ってどう使うの？」

使い方を聞き忘れていたのを忘れていた誠治。

「ああそれはね…」

ルケアは魔法球を1つ出し手に持つ。

「使用するって意志を持ってキーワードを言うの。それが引き金トリガーになるから」

「何でも良いの？」

「ええ、私は単純に『開け』って……」

その途端ルケアが持つ魔法球が赤く光り出す。

そしてバスケットボール大の火球が出現し誠治に向かって飛ぶ。

「うわあああー!!」

「……………あれ？」

悲鳴を上げ逃げ惑う誠治。

「解散します」

「お願い見捨てないでー!!」

暫くの間ルカサの街で包帯姿の男にすがりつく少女の姿が見られた。

8話 ランク昇級試験

誠治が冒険者になり一週間が経った。

初日こそ酷い目にあつた誠治だったが順調に依頼をこなして行つた。

ルケアは最初の失敗をかなり反省したらしく以後大した失敗はしなくなつていた。

そんなある日、誠治とルケアはギルドでナナと話していた。

「ランク昇級試験？」

「ええ、そろそろ請けてみたら？」

ナナからの提案に誠治は首を傾げる。

「早くないですか？」

「そんな事無いわ」

もつと上のランクなら話は別だが現在誠治のランクは最低ランクのE。余程実力が共合わない以外一週間は決して短くない。

「解りました。で、内容は？」

「ランバード三匹の討伐、但し肉は傷つけないのが条件」

ランバードはグルダの森に生息する鳥型の魔物。鷹や鷲に似ており性格は温厚だが畑などの作物を食い荒らすので嫌われている。ただ肉は美味でルカサでは少し高級な料理に良く使われる。

「後、必ず1人でやる事。あなたの試験だから」

そう言うナナだがEからDの昇級試験程度で手伝いがあってもさほど言われる事は無い。上のランクだと失格になる場合もあるが。

「そう言えばルケア姉さんの時は上手くいった？」

「そ、そりゃあ勿論……」

「かなり手間取ったわよ」

「ちよつとナナ!？」

「ルケアの弓の腕はそこそこんだけ見付けるまでが大変でね、
「今日も居なかつたあゝ」ってよく私に泣きついてたわ」

「もうお止めてよ!」
顔を真っ赤にして飛びかかろうとするルケアに身長差を生かし軽くあしらうナナ。

「期限はあるんですか？」

「3日よ」

「うん、なら大丈夫だ」

「……………」
自信あり気な誠治に無言で睨むルケア。

「ね、姉さん？」

「簡単そんな依頼でも甘く見ちゃだめよ!……」

「自分は期限ギリギリだったから拗ねてるのよ」

「ちがーうー!!」

グルダの森。

誠治はジツと息を潜め獲物を見据えている。

一歩二歩とジリジリと近付く。

「クワアー!!」

異変に気づいたランバードが飛び立とうと翼を広げる。

ガシッ。

それを許さず誠治は両手で捕まえ首を捻る。

ランバードは断末魔を上げる隙も無く息絶える。

誠治はナイフで首を切り落とし逆さにして血抜きをする。

ランバードを捕まえるには大まかに2つ手段がある。

一つは弓や魔法球等で撃ち落とす。

それらの手段が無い場合は地上に降りた時を見計らい捕まえる。

ランバードの好物は鼠でそれを捕食する時に地上へ降りてくる。

ただ気配に敏感な為素手で捕まえるのは難しく大抵は罟を張るか網でとなる。

しかし誠治は森に入り三時間余りで既に二匹のランバードを捕らえていた。

誠治は気配を消す修行の一貫でよく雀や燕を捕まえさせられていた。雀等を素手で捕らえるのは想像以上に難しく、少しでも気配を悟られるとまず無理なのだ。

それを誠治は11歳の頃からやらされ、完璧に出来るようになったのは16歳だった。今の誠治なら容易い事と言えた。

「居た……」

運良く五メートル先で鼠を捕食しているランバードを見付ける。同じ要領で近付きあっさりと捕らえる事に成功する。

「こりや夕飯にはまだ早いな」
日はまだ高い。時計は無いが感覚的に3時頃だろうと誠治は推測する。

「ルケア姉さん驚くかな？」
出発前の時を思い出す。
付いて行くと言い張るルケアに困り誠治は帰ったら豪華な食事を奢るからと説得した。ゴネる子供は食べ物で釣るのが一番……そんな事はとても本人の前では言えないが。

「ぐはあ……」

突然背中に衝撃を受け吹き飛ばされる誠治。

肺の中の空気を吐き出された息苦しさを感じながら背後を見る。其処にいたのは鹿に似た生き物だった。

ただ大きさは誠治の知っている鹿より一回り大きく全身黒、角は絡

み合うようになっており一つの塊になっている。

ブラックディア。

グルダの森に生息する凶暴な鹿。

ブラックディアは目を真つ赤にし止めと言わんばかりに迫ってくる。

（ルケア姉にああ言われたのにな）

それは油断だった。

誠治は忘れていたのだ冒険者が死と隣り合わせの職業というのを。

（爺いに知れたらえらい事だな）

何故か今そんな事を考えてしまう。

清十郎の修行は厳しかったが特に怠けや油断などしようものならそれこそ死にそうな稽古をさせられていた。

（ああ…だからか…）

誠治は変に納得してしまう。

死なないために死にそうなる位修行をさせられたのかと。

ヒュンヒュン。

風を斬る音がしたと思いきやブラックディアの顔に矢が突き刺さり突進が止まる。

「え？」

「セイジー！！」

自分の名を呼ぶ声がすると其処には弓を構えているルケアの姿があった。

「グルラア！！」
ブラックディアが再び誠治に突進して来る。顔に矢は刺さっているが浅かった為一時止まっただけだった。

しかし誠治にはその僅かな時間だけで充分だった。呼吸を整え気を全身に巡らせる。

ブラックディアが動く前に側まで移動し胴体に蹴りを入れる。

ズガアアン！！

ブラックディアは何本もの木をなぎ倒し吹き飛ばされ岩に激突すると動かなくなる。

「あたた…」

誠治は上体を軽く動かし怪我の状態を確かめる。多少痛むが骨折や内臓に異常はなかった。

「大丈夫！？と言うより強いよねセイジ…」
実は誠治が戦う所を初めて見るルケア。
ブラックディアは討伐ランクC。此処グルダの森でグルベアーと双壁を成す強力な魔物、それを一撃で倒した誠治にルケアは驚いていた。

「いや…ルケア姉さんのお蔭だよ」
謙遜ではなく本音だった。

あの時ルケアが弓でブラックディアを攻撃しなかったら、死にはしなかっただろうが恐らく大怪我をしていた。

「へへへ、まあパーティーだからね」

「でも来ちゃったんだ？」

「う、あの……やっぱり心配で……」
俯き、手をゴニョゴニョとこねくり回す姿に誠治は笑い出す。

「笑わなくていいじゃない……」

「ごめんごめん、さあ帰ろうか」

「うん、そうしょ！」

こうして2人はルサカの街に帰って行った。

セイジ・ヤマガミ。
ランク昇級試験合格。
Dランクに昇格。

9話 運がある者ない者

誠治がDランクに昇格し3日。

EランクとDランクからの違いは主に依頼の内容だ。

Eランクの依頼は採取と雑務のみでまずは依頼に慣れて貰う事から始まる。Dランクからは討伐系の依頼が出始め、危険度がぐっと上がる。

つまりDランクから本格的な冒険者と言えるのだ。

……なのだが。

「この依頼を頼みたいの」

ギルドへ来ていた誠治とルケアを呼び止めたナナは一枚の依頼書を渡してきた。

『五連草12束の採取。但し同じ根から4束づつ採取する事。』

報酬10万キュエル。

受諾可能ランクD。』

「これですか？」

「ええ、どうかしら」

誠治は依頼書を確認める。

採取系にしては報酬が高額だ。勿論採取系でも高額の依頼はあるが、それはもっと上のランクになる。

Dランクの採取系だと大体1万キュエル前後が殆ど。

10万キュエルは破格とも言える。

「何でこんなに報酬が高いんです？」
誠治は素直に聞いてみる。
依頼を請けて手に余るようでは困るからだ。

「この五連草が少し厄介だね」
この五連草は人参の葉に似ており滋養強壯薬の材料として用いられている。
その名の通り一つの根に五つ生えている。

「でも問題が採取時だね。五つの内一つだけの外れを引くと残りが枯れてしまうの」
外れを引くと残りは全て枯れる。最小で一束、最大で四束採取出来るのだ。

つまりこの依頼は外れを一度も引くなと 言うこと。

「何か見分ける方法はあるんですか？」

「外見では無理。一応『解析』の魔法球なら見分けられるけど、一回使ったら終わりだし50万キユエルするから割りに合わないの」

「何てギャンブル性の高い草なんだ…」

「でもこれはセイジ君じゃなくてルケアに頼みたいの」

「ルケア姉さんに」

「この子引きは強いのよ」

「まあね、お金の無い時はよくこれで稼いだから」

「え〜と俺は？」

そう誠治が言っているとナナとルケアは顔を見合わせる。

「セイジ君はねえ…」

「運が無いから…」

「うつ！?…」

二人に言われ言葉に詰まる誠治。

確かに誠治は運が無いと言える。

分かり易いのはくじ運。宝くじや賭け事、福引き。これらの物に当たった事が一度もない。

この世界に来ても運の無さは変わらない。

誠治が果物を買つと甘くなく、飲み物を買おうと並ぶと寸前で売り切れ。

そんな所を何度もナナとルケアに目撃されそう判断されたのだった。

思えばこの世界に来て早々見知らぬ女性に囮にされ、油断したとは言えブラックディアに突き飛ばされ、そもそも望んでもいないのに異世界に来てしまっている現状。

しかし、

「俺がやる」

はいそうですかと引き下がる程誠治はオトナではなかった。

グルダの森に入り川辺の日陰を探す。

「あれよ」

ルケアが見つけ誠治が合流する。

全く同じ草が五つ直線に並んでいる。

「姉さん俺がやるから、いいね？」

「ま、まあ頑張って」

誠治の意気込みに若干引き気味のルケア。

「あつと言う間に終わらせるよ、くっくっくっ……」

誠治は危機迫る形相で五連草と対峙する。

確かに全く一緒に区別がつかない。

（こんな時は感性に任せる！！）

ジックリと五連草を見据える。

視覚ではなく感覚で見極めようと氣を巡らせる。

「これだー！！」

その中の一本を掴み勢いよく引き抜く。

（手応えあり！！）

確信を持つ誠治だったのだが……

ものの見事に残りの四本は枯れてしまった。

「ええ！！！」

「あゝあ」
シヨックに固まる誠治と予想出来てたのかりアクションの少ないルケア。

「今のは偶々だ！！次だ次！！」

それから計四回挑戦して全て一回目で外れを引いた誠治。

「こんな……こんな筈じゃ……」
すっかり意気消沈し体育座りでいじける誠治。

「気が済んだ？じゃあパツパツと済ますわよ」
やれやれと言った感じでルケアは五連草を探し見つける。

「じゃ抜くわよ」
さして考えず五本の内の一本を抜く。
残りの四本は枯れずそのまま残る。

「ホイホイホイっ」と
残り三本をアツサリ抜く。
一本も枯れず四本の採取に成功する。

「そんな簡単に……」
何の気負いもなくスンナリやってのけたルケアに唾然としようなだれ

る誠治だった。

残りもルケアが簡単に済ませ二人は帰路についていた。

「ルケア姉さんは運が強いのか？」

何とか立ち直った誠治がルケアに聞いてみる。

「うーん……そうね、実感は無いけど良い方だと思っよ？今まで仕事で怪我した事ないし」

「……………それって周りの運を吸い取ってるんじゃないか？」

「まさかあ」

ビチャツ。

笑い飛ばすルケアと頭に鳥の糞が掛かる誠治。

誠治は泣きなくなった。

閑話 兄を訪ねて2…

誠治が自らの運の無さにうなだれていた頃。

飛鳥は都内にあるDVDショップに来ていた。しかしそこはある一つのジャンルを扱う店舗であった。

飛鳥が店内に入ると客達は驚き下を向く。彼女のような美少女は此処ではかなり浮く。しかし飛鳥は何の躊躇も無く店内を見て回る。

「居ませんか……………」

飛鳥は落胆する。

この店は兄誠治が良く来る言わばお気に入り。それを知ったのは勿論本人からではなく誠治の部屋から出たゴミの中のレシートから。

ストーカーと言う無かれ、総ては誠治を慕う想いからの行動である。

本人の意思は無視だが。

ある棚で足を止め一枚のDVDを手取る。

『家庭教師のお姉さん〇イ〇リしてあげる』

ジッとそのDVDを見る。

「年上の何が良いんでしょうか……………」

兄誠治の部屋を物色し出て来たDVDを分析した結果誠治は『年上のお姉さん』好きと結論づけた飛鳥。

愕然とした飛鳥だったが直ぐそれらのDVDを処分しすべて『妹物』
と取り替えておいた。
飛鳥に抜かりは無い。

「はあ…お兄様なら何時でも私を好きにしても宜しいのに。こんな
物を見るのは腐れ童○だけです」

そう言い残し飛鳥が店内を出ると客達は誰ともなく商品を棚に戻し
て行った。

「次はご友人の所を訪ねますか…」
飛鳥の兄を探し求める旅はまだ終わらない。

10話 お人好しの冒険者

それはある昼下がり。

誠治とルケアは昼食を済ませギルドに向かっていた。

「姉さん気持ち悪くない？」

「何で？」

「いや大丈夫ならいいんだ」

こんな事を言うのは先程までの昼食の光景を思い出していたから。

この世界の食事は意外と美味しく、塩などの香辛料はさほど貴重と言うわけではない、そのため値段は安い。

よく見る異世界物では香辛料は貴重で味が薄いと言っていたので誠治には嬉しい誤算だった。

そんな訳でついつい食べ過ぎてしまう誠治のだがルケアに比べれば大した事はなかった。

テーブルに積み上げられた料理の山。

小さな身体でそれを次々と平らげるルケア。 見ているだけで胸やけする程だった。

「セイジは意外と少食なのね、駄目よ男の子なんだからしっかり食べなきゃ。 冒険者は体が資本よ」

「体が資本ねえ……………」

「何か異論でも？」

「滅相もない！」

ジロリと睨むルケアに慌てて何でもないと首を振る誠治。相変わらず自分の容姿を言われるのを嫌うルケアである。

「きゃあ!!」

突然目の前に女性が倒れてくる。

「おっと!?!」

「え?え?」

辺りを警戒する誠治に何が起きたのか解らず戸惑うルケア。

「しつこいだよ!!」

その女性を恫喝する声の主を見る。

冒険者風の男達が4人居る。

どうやらその男達が女性を突き飛ばしたらしい。

「そんな安い報酬で出来るか!!」

そう言い放つと男達は居なくなる。

「何なのアイツら!!」

「大丈夫ですか?」

「はい、済みません」

女性は誠治が差し出した手を握り立ち上がる。

「アイツら冒険者でしょう!?ギルドに通報しましょう!!」

ギルドに登録している冒険者には様々な規定があるのだが、その中に一般の住民に危害を加えてはならないとある。

内容次第では厳しい処分が下る時もある。

「いえ……私が悪いんです」

「事情があるんですね？宜しければ聞かせて貰っても？」

「姉さん!？」

誠治はルケアを伴いその女性から離れる。

「まさか関わる気なのか!？」

「見捨てろって言うの?？」

「そうは言わないけど、わざわざ自分から関わらなくてもいいじゃないか」

「これも縁よ。さ、場所を移しましょ」

ルケアは渋る誠治を引っ張りその女性と一緒に歩き出す。

「どうぞ」

現在三人はその女性の家にいる。

女性はエルと名乗った。

栗色の長い髪に優しい表情。歳は前の経験から聞かなかつた誠治だが大体16〜7歳位に見える。

ヒラヒラした空色のワンピースが似合っている。

「あっ美味しい」

「うん確かに」

誠治とルケアは出された飲み物を一口飲む。爽やかな香りが心地良い。

「それでどうしたんですか？」

「実はあの人達に採取の依頼を頼んだんです」

「ギルドを介してじゃなくて直接？」

「はい……」

基本的に冒険者に依頼を頼む時はギルドを介する。

そうしないと途中で依頼を放棄されたり報酬が支払われなかったりする場合がある。

「本当ならギルドに頼んだ方が良いのは解っているんです。でも報酬の額が用意出来なくて」

「因みに何を採取するんですか？」

「ゴールデングルです」

「それは……」

「姉さんゴールデングルって？」

「別名、魔力果実って言われる果物よ。万能薬の材料に使われる物で………確か一個200万キュエルはする」

「200万!？」

勿論それだけする理由はある。

まず数が少なく実がある場所がグルダの森の奥地。

其処にはグルベアーが群れをなしており非常に危険でBランクに相当する依頼だ。

「払える報酬は30万キュエルで目一杯なんです。無茶は解っているんですが母を治すにはゴールドングルがどうしても必要なんです」

エルは奥の扉を見やる。恐らく其処には母親が居るのだろう。

「お母さん病気なの？」

「はい……衰弱が激しくて此処一週間が山なのです」と、エルは沈痛な表情を見せる。

「しかしなあ………」

確かに気の毒だと誠治は思う。

しかし同情だけでこの依頼は請けない。

冒険者は報酬を貰い依頼を遂行する。

言わば報酬は命の値段と言っている。

その報酬と命を天秤に掛け依頼を請けるかどうか判断する。

そしてエルの提示した報酬では天秤にすらならない。

非情でもこの依頼は請けるわけにはいかない。

「姉さん……」

そう判断した誠治はこの場を立ち去ろうと席を立つ。

ルケアは誠治の意図を察したのか頷き立ち上がる。

「エルさん私達に任せて!!」
察していなかった。

「おおい!?!」

「ええ!?!」

驚く誠治とエル。

驚く内容は違う。

誠治は「何言い出すんだコイツ」の驚き。

エルは「まさかこの依頼を請けて貰えるなんて」の驚き。

「必ずゴールドエンジェルは私達が持つてくるわ!!絶対お母さんを直
しましょう!!」

「ありがとう!!ありがとうございますルケアさん!!」
エルとルケア2人の手を握り合う光景に誠治は頭を抱えた。

11話 餓犬

「馬鹿でしょあなた？」

「違うわよ馬鹿って言う人が馬鹿なのよ!!」

誠治は目の前で繰り広げられている子供の喧嘩に呆れながら眺めていた。

結局ゴールドリングルを採取する事になった誠治とルケア。

無論誠治はルケアに考え直すよう言い続けた。

しかし一向に聞く耳持たないルケアに誠治は諦めた。この様子だとルケア1人でも行つて仕舞いかねない。

流石にそれは拙いので誠治も無理矢理納得した。

だが依頼を請けたはいいがゴールドリングルのある場所が解らない為、ギルドに調べに来たのだ。

丁度ナナが居たため、ルケアが「ゴールドリングルって何処にあるの？」と聞いた所で冒頭の言葉に繋がる。

「馬鹿だ馬鹿だと思ってたけど真性の馬鹿だったのね」

事情を聞いたナナだったが更にルケアを責め立てる。

「見捨てるって言うの!？」

「そうよ」

「!？」

予想していなかった言葉に黙るルケア。

「困ってる人を助けるのは美德だけどいちいちそんな事してたら本
当に死ぬわよ」

「で、でも……」

「あなたが死んだら最低でも私とセイジ君が悲しむ。あなたはそれ
でもいいの？」

「……………」

ルケアは俯いたまま首を横に振る。

「なら今度からは必ず私に相談してね？」

「……………うん」

力無くしかし、しつかりと頷くルケア。
そんな光景を誠治は感心しながら見ていた。

最初は喧嘩をして、次に一転優しく諭す。流石は幼なじみだけの事
はあると。

ナナの方が年下なのだが。

「まあ請けたものはしょうがないわね」

「場所は解るんですか？」

「解らないわ。ゴールドングルの木の数は結構あるけど実際に実を
実らせるのは数十年に一個か二個って言われてるから」

「じゃあどうすれば……………」

「冒険者グループに案内役の派遣を頼んだら？ルケア、あなた『銀龍』に入ってたでしょう。あそこなら居る筈よ」

「えーと……………」

「何？」

「クビになったんだ姉さんは」

目を逸らすルケアを不審がるナナに誠治は溜め息混じりに言う。

「あなた馬鹿なの？」

「ううう……………」

肩を落とし道を歩くルケアと誠治。

あれからゴールデンダングルの案内役を派遣して貰う為にあちこちの冒険者グループを訪ねていた。

案内役を派遣して貰うにはまずその冒険者グループに登録しなければならぬ。

が、ことごとく拒否されていた。

原因はルケア。

先日冒険者グループ『銀龍』の登録を抹消されたルケア。

その理由は既に広がっており好んでそんな厄介な冒険者を抱える所は無かった。

2人は古ぼけた酒場に来ていた。

めぼしい所は全て周りこの場所が最後だった。

「此処に入るの？」

あからさまに嫌そうな顔になるルケア。

「仕方ないだろう？」

と言うものの誠治も乗り気がしない。

その酒場は見た目廃墟かと疑いたくなる程朽ちている。

ギイと軋む音をさせながら扉を開ける。

中は意外な程小綺麗で2人は内心ホッとするが、まだ陽は落ちていないのに薄暗い。

「客か？物好きもいるもんだな」

カウンターから声を掛けられる。

白髪白髭の痩せた男がグラスを拭きながら迎えた。

40代と言えばそうだし60代とも言われればそう見える。

「此処にゴールデンダングルの場所まで案内出来る冒険者は居ますか？」

「ほう、そっちの客か。尚更物好きだな」

男はグラスに液体を注ぐと2人の前に差し出す。

「ようこそ『餓犬』へ。私は代表のグラントだ」

冒険者グループの名称は現実に居る魔物の名を使う。

どの魔物の名を付けるかによってその冒険者グループの指針が解る。

『銀龍』は伝説の龍。神々しいその姿から別名『神龍』と呼ばれて

いる。

『餓犬』は誠治の世界で言えばハイエナのような存在。大して強く無いが狡猾で他の魔物から獲物を横取りしたりする。そんな魔物の名を使うこの『餓犬』は自虐的な集まりと言える。

「ゴールデングルか………居るには居る。だが高いぞ？」

「因みに幾ら？」

「200万キュエル」

「えー!!」

ゴールデングルの市場値は約200万キュエル。つまりそれを売ったとしても利益は出ない。勿論30万キュエルでは話にならない。

「それで構いません」

「セイジそんなお金……」

「あるにはある」

現在誠治とルケアの全財産は250万キュエル。ハッキリ言っただけなら厳しいが案内なしに比べれば仕方なしだ。

「では前金で50万キュエルだ」

誠治は懐から銀色の円形硬貨を五枚出し渡す。

「ふむ確かに、では早速会わせよう。サリュア仕事だ!!」

「うるさい!!聞こえてるよ!!」

女性の怒鳴り声が奥から聞こえてくる。

「全く……ゆっくり眠れやしない」

「文句言わずにサッサと出て来い」

女性が頭を掻きながら出てくる。

赤いおさげ髪。美人と言えば美人だが目つきの悪さでキツイ印象を受ける。

「お、お前は!!」

「どしたのセイジ？」

誠治はその女性、サリユアを見た瞬間叫んでしまう。

「何だい人の顔を見るなり失礼……」

サリユアは誠治を凝視し、止まる。

この異世界に来て初めて遭遇した人物であり、そして誠治をグルベアーの囿にした人物。

サリユアとの再会だった。

12話 ゴールデンゲル

翌日。

サリユア、ルケア、誠治の三人はゴールデンゲルを目指しゲルダの森を進んでいた。

先頭をサリユアが行き次にルケア、殿を誠治が務める。

行程は問題無く明日には目的地に着く予定だ。

「ここで野宿よ」

開けた場所に出るとサリユアはそう言って止まる。

「ふう〜疲れたあ〜」

「じゃあ薪を拾ってくるよ」

「よろしく〜」

両足を投げ出し、だらけるルケアを余所に誠治は二人から離れる。

思ってもいなかった再会をしたサリユアと誠治。

実はこの二人あれからまともに話していない。

サリユアは見捨てた罪悪感からの気まずさだが誠治は今更その事で何か言うつもりはなかった。しかしだからと言って気軽に話しかけも出来ないでいた。

もしルケアにあの時の事を知られれば面倒な事になるのは目に見えている。

そんな訳で誠治はサリユアとは極力話さない事にした。

どの道この依頼が終わればサリユアと会う事は殆ど無いだろうと思っっている。

夜になりグルダの森は闇に包まれる。
地面がゴツゴツして寝れないと言っていたルケアは既に夢の中。
そんなルケアとは別にサリユアと誠治は焚き火を間に挟み気まずい
時を過ごしていた。

「恨んでる？」

不意にサリユアが話しかけてくる。

「うーん…正直よく解らん」

「何それ？」

誠治の言葉が理解出来ず首を傾げる。

「もし自分がアンタの立場だったらと考えてね」
誠治は焚き火に薪を放り込む。

「グルベアーを倒せない、逃げるのも困難。でも死ねない、死にた
くない。そう考えると……まあしょうがなかったのかなと」

「随分なお人好しね」

「違うよ、面倒が嫌なだけだ。なんなら此処でアンタに罵詈雑言吐
こうか？」

「遠慮しとく」

サリュアは肩を竦める。

誠治はよく周りから『人が良い』と言われる。

しかし誠治は違ふと思っている。

清十郎という変わった身内はいるが誠治自身は平穩を望んでいる。面倒事は極力避け首を突っ込まないようにしている。困ってる人が居ても緊急性が無ければ無視するし、今回の依頼も請けるつもりもなかった。

では何故今此処いるのかと言うと、誠治が拒否しても『真性お人好し』のルケアは1人でも行ってしまふ。流石にほっとく訳にはいかなかった。

そう言う意味で言えば誠治もお人好しかも知れないが。

「所でゴールデンゲルはありそうなのか？」

「あなた運は良い方？」

「……………いや。ただどルケアは良い」

「じゃあ有るんじゃない？私も運が良いし。何せあのゲルベアーから逃げれたからね」

ニヤリとするサリュアに苦笑いでしか返せない誠治だった。

「次が最後よ」

翌朝。

再び歩き出した三人は昼前にゴールデンゲルがあると予想される場所に到着していた。

しかし其処には無く、他の場所にも移動したが結果は同じだった。次に行く場所がサリュアの知る最後で無ければそのまま帰還する事になっている。今までは運良く強力な魔物に遭遇していないものの、何時遭遇するか解らないからだ。

「あつ……」

最初に見つけたのはルケアだった。

「ふう、やっぱり運が良いわ私」
サリュアがホツとし呟く。

「あれがゴールデンゲル……」
誠治もそれに気づいた。

目線の先には枝に実った一つの果実。

形は林檎のようだが色がその名の通り黄色色だった。

光に反射し神々しいまでの存在感を示すその果実は明らかに普通の果実とは違っている。

「やったー!!」

ルケアは飛び跳ねんばかりに喜び走り出す。

「姉さん走ったら……」

転ぶぞ、といい掛けた時ルケアの身体が空に浮き吹き飛ばされたよ

うに誠治に向かい飛んでくる。

「姉さん!!」

突然の事だったが誠治は何かルケアを受け止める。

「姉さん!! 姉さん!!」

誠治が呼び掛けるが返事は無い。

ルケアの額からは血が流れグツタリとしている。

「薄汚い人間がそれに触れるでない」

誠治はその声の主を見やる。

20代位の青年。長い銀髪に赤い瞳。全身を黒いマントで覆っている。

「それは我が種族にこそ相応しい物だ」

青年は愉快そうに言い放った。

13話 ヤマガミ

その姿をサリユアは知っていた。

いや、正確に言えばその容姿を特長とした種族を知っていた。

「バンパイア…」

この世界の全人口7割は人と言う種族であり、残り3割が別の種族となる。

その種類は様々で数えればキリがないほど。

その中にバンパイアと言う種族がある。

人より優れた身体能力を持ち、大多数のバンパイアが魔法を行使出来る。

大昔に1人のバンパイアが万に近い人を惨殺した事もあった。

今はそんな事は無くあまり人と関わらなく見かける事は無い。

しかしその余りな強力な力な為恐れている人は多い。

そしてバンパイアには共通した外見的特長がる。一本一本金属の糸のような銀髪に血のような赤い瞳。

そう、目の前に居る青年のような。

「何のつもり!？」

サリユアは極力平静を装って話しかける。

「この娘がゴールドングルに触れようとしたからだ」

「それだけで？」

「これは貴様等のような種族が気安く触れていい物ではない。これは我ら気高きバンパイアに相応しい物だ」

「ゴールデングルは万能薬の材料でもあるが別名『魔力果実』とも言われ、浪費した魔力を回復出来る。」

「バンパイア等魔法を行使出来る種族からすれば食べるだけで魔力を回復出来るゴールデングルは彼等にとっても貴重な物なのだ。」

その事はサリユアも知っていた。

しかしバンパイアに遭遇するなど思いもしなかった。

グルダの森でバンパイアに遭遇したなどサリユアは聞いた事がなかった。

今回のこれは完全なイレギュラーであった。

「……………そう、解った。私達は諦めるから帰らせて貰うわ」

相手がバンパイアである以上戦うという選択肢はない。

逃げて背後から魔法を撃たれるのがオチ。

ならゴールデングルは諦め見逃して貰うのが一番の得策。

「ほう……………聞き分けが良いな。良からう、サッサと居なくなれ」

「ええ……………セイジ？」

サリユアは退こうと誠治を見る。

しかし誠治はグツタリとしているルケアを抱きかかえ動かない。

「何してるの行くわよー!!」

バンパイアの青年の考えが変わる前に此処を去りたいサリユアは苛ついた口調で言う。

「…………駄目だ」

誠治はそう呟きルケアをそっと地面に下ろす。ルケアの呼吸と脈はシッカリしており、額の傷もそう深くはない。

「何がよ？あなたまさかバンパイアと戦う気！？」

「爺が感情に支配されるなって言ってたけど…………駄目だ」
誠治はバンパイアの青年を静かに見据える。

「あなた馬鹿！？人がバンパイアと1対1で戦って勝てる訳ないでしょ！？相手が見逃すって言ってるんだからくだらない意地なんか張ってないで逃げるわよ！！」

「まさか俺に少年漫画の主人公みたいな心があるなんてな」誠治は気を失い眠るルケアを見る。

「姉がやられて弟が黙ってる訳にはいかないからな。おいアンタ！名前は何？！？」

「名だと？まあよい我が名はジエスメリン・ダース」

「じゃジエスメリン、ぶっ飛ばすから」

「……………何？」

「ちよつと何言って！？」

二人を無視し誠治は呼吸を整え気を全身に巡らせる。

この世界に来てから誠治は何度か気を試してみた。

どういう理屈かは解らないがこの世界で気を使うと元の世界の最大

約三倍の効果があった。

誠治は100メートルを12秒前後で走る。

バンパイアの青年、ジエスメリンとの距離はおよそ20メートル。

誠治はジエスメリンに向かい駆け出す。

「消え…!?!」

ジエスメリンは目を疑った。

目の前に居た人族の青年が消えたからだ。

いや正確に言えば消えたように見えたのだ。

「ぐはあっ!!」

腹部をとつもない衝撃が襲いジエスメリンは吹き飛ばされる。木をなぎ倒し50メートルは飛ばされた所ようやく止まる。

「え?」

サリュアは目の前で起きた光景について行けず目を点にしている。

「き、貴様ああー!!」

ジエスメリンは立ち上がり空に向かい怒号する。

「意外と丈夫だな」

そんなジエスメリンの様子にも誠治は動じずサラッと立つ。

「許さん!!許さんぞ!!人の分際で我の身体を傷つけるとわ!!」

鬼の形相で誠治に手をかざす。

「死ねい!!『風よ』!!」

見えない風の刃が誠治を襲う。

しかしもう其処に誠治は居なかった。

「遅い」

不意に聞こえた誠治の声にジェスメリンは慌てて顔を向ける。

「ぐげえ!!」

グシャツとした音と共に横つ面を殴られたジェスメリンはそのまま地面と激突して動かなくなる。

「何が起こったの………?」

サリュアの目にはただジェスメリンが吹き飛んでいく事しか解らない。

とは言っても誠治のした事は単純な事。

相手が何かする前に殴る。

ただそれだけ。

最初の攻撃時に誠治はジェスメリンに接近したが20メートルあった距離を2秒と掛からなかった。二回目もジェスメリンが魔法を撃つ前に接近し殴っただけ。

誠治は清十郎から武術や武道等は一切習っておらず身体能力の鍛錬と氣の扱っただけを習った。

つまり氣で強化した身体能力でただ殴っただけなのだ。

魔法は確かに脅威だが撃つ前に倒してしまえばいいだけの話だった。

「さて、帰るか」

誠治はジェスメリンをもう見もせず、ゴールデンゲルをもぎ取りバツグに仕舞う。

「あなた強かったの?」

「多分な。ただ家の爺には勝てんがな」
この世界での氣の強化は凄いが、それでも清十郎に勝てる気がしない誠治だった。

「じゃああの時のグルベアー……」

「ああ倒したよ」

「言えば良かったじゃない倒せるって！？それなら逃げなかったのに」

「あの時は解らなかつたんだよ」

「でも……」

「しっ！……ちっ、囲まれてる」

まだ言い足りないサリュアを制し周りを伺う誠治。

さつきまで無かつた氣配が少なくとも10以上ある。

誠治はルケアを抱きかかえ辺りを警戒する。

するとサリュアと誠治を取り囲むように計15人が姿を現す。

その姿は皆銀髪に赤い瞳。

「う、嘘」

サリュアは絶望に氣を失いそうになる。

あのバンパイアが15人。その氣なら一つの国をも滅びす事が出来る程の人数。

「合図したら姉さんと一緒に逃げてくれ」
誠治はルケアをサリュアに預ける。

「あなたまさか……」

「他に策はあるか？」

誠治が囮となる二人を逃がす。

奇しくもサリユアと誠治が初めて会った時と似た状況。ただ今回のほうが格段に状況が悪い。

「……………解った」

「よし行くぞ。1、2、3……今だ!!」

「お待ち下さい」

と、一人のバンパイアが前に出てくる。

4〜50歳位の男性。

毅然とした雰囲気、執事のような印象を受ける。

「ヤマガミ様ですね」

「!?!……………何故知ってる？」

その言葉に誠治は動揺してしまう。

セイジの名ではなくヤマガミで呼ばれた事に。

ヤマガミを名乗ったのはルケアとギルドの登録した時だけだ。しかも此処は異世界、ヤマガミなんて性は恐らく無いからだ。

「我ら一族の者がヤマガミ様のお仲間を傷つけた事を深くお詫びいたします」

その男が頭を下げると他のバンパイア達も頭を下げる。

「一体……………」

分けが解らない誠治とサリユアはただ啞然とその光景を見ていた。

「我々はその者を回収しに来ただけですのでゴールドデングルはお持ちなつて結構ですのぞ」
それではと軽くお辞儀をした男は立ち去り15人のバンパイアとジエスメリンは居なくなつた。

「喜んでたねエルさん」

「ああ」

ルサカの街に戻つたルケアと誠治はゴールドデングルをエルに届けた。

エルは二人が恐縮する位涙ながらにお礼をした。

ルケアの頭には包帯が巻かれている。

気を失う寸前の時の事をルケアは覚えておらず誠治は木に頭をぶつけたと説明した。

本当の事を言う必要はないと誠治は判断した。

何故あのバンパイアは自分の姓であるヤマガミを知つていたのか？
しかも様付けで呼んでいた。
此処は異世界。自分は勿論家族が関わつているとはとても思えない。

「どうしたのセイジ？」

「ん、あーナナさんに怒られるなって。ほら姉さん怪我したから」

「あー！！そうだった…どうしよう…」

どんよりするルケアをセイジは慰めながらギルドへ向かった。

閑話 兄を訪ねて3…

「お待ちしておりました」

此処はとある喫茶店。

飛鳥はある三人に集まって貰っていた。

「あーすかちやくん 相変わらず可愛いねえ」

軽薄そうな青年が手を振りながら飛鳥の隣に座る。

彼は笹川 信彦。

「ゴメンね遅れちゃった」

人懐っこい笑顔を浮かべ飛鳥の向かいに座る女性。

彼女は蛭名 京子。

「用事があるんだからさっさと済ませなさいよ」

機嫌悪そうに京子の隣に座る女性。

彼女は三宅 香。

皆が注文したのを見計らい飛鳥は話し始める。

「皆さんにお集まり頂いたのは他でもありません。実は兄の行方が解らないのです、心当たりはありませんか？」

「え？行方不明って事？大丈夫なのそれ？」

京子は初耳なのか驚いた様子。

「あの野郎、旅行の待ち合わせをすっぱかしたから文句言ってやる

うと電話しても出ないと思ったら……」
信彦は忌々しそうに携帯を見る。

「……………」
香は黙って飛鳥の話を聞いている。

「そうですか。私とお爺様以外の人と会った可能性があるのは皆さ
んだと思ったのですが……………」
飛鳥は落胆したのか深い溜め息を吐く。

実はこの三人、誠治と旅行に行く予定だった。
寸前で誠治が清十郎に攫われた為中止になったが。

「逃げたんじゃないあなたから？」

「……………意味が解らないのですが？」香の言葉に飛鳥は冷静を装いな
がら聞き返す。

「ゴメンね飛鳥ちゃん。最近、香寝不足らしいのよ」
慌ててフォローする京子。

「どこかの変態な妹に言い寄られて迷惑だったからじゃないの？」
しかし香は飛鳥を睨んだまま言い放つ。

「兄はそんな素振り見せませんでしたか？」
飛鳥は香の視線から目を離さない。

喫茶店内はピリピリとした空気になる。

実は飛鳥と香は過去何度も会っているのだが毎回このような雰囲気
になる。

兄を愛する飛鳥に誠治に好意を抱く香。
仲が悪いのは必然と言える。

「大体ブラコンなんて気持ち悪いのよ!!」

「あなたが気持ち悪がっても私には関係のない事です」

「あなたがどんなに誠治君の事を好きでも報われない!!誠治君は倫理観のしっかりした人だから!!」

「確かに。でも私には切り札があります」

飛鳥はニヤリと口元を歪ませる。

「私達は兄妹ですが血は繋がっていません」

「何ですって!!」

あまりのショックにテーブルを叩き立ち上がる香。

「そんな事此処で言って良いのかしら…」

止める事の出来ない京子はアイステイーを飲みながら呟く。

「まあまあ飛鳥ちゃん落ち着いて……」

「触らないで下さい」

肩に触れようとした信彦の手首を掴み一回転し捻る。

「肩がー!!肩がー!!」

ポコツと何か外れる音がしたあと信彦は肩を押さえ転げ回る。

「そんな訳ですので、私は手段を選ばずに必ず兄を陥落してみせま

す

「ぐぬぬぬ……」

「肩がー！！肩がー！！」

「アイステイー美味しいー」

勝ち誇る飛鳥に悔しがる香。未だ床を転げ回る信彦に我関せずの京子。

注意したい店員だがとばつちりを恐れ近寄れないでいた。

「だったら私が先に誠治君を見つけて保護するわ！！」

「やってみたら如何です？まあ無理でしょうけど」

「私が誠治君に真つ当な恋愛を教えて真つ当な道に戻す！！行くわよ京子！！」

「はいはい。その前に買い物付き合ってね」

勢い良く喫茶店を出て行く香に、引っ張られて行く京子。

「お兄様を見つけるのは私です……………」

飛鳥は決意に満ちた目をし席を立つ。

「肩が……………肩が……………」

残ったのは肩が外れた信彦とその対応に困り果てている店員だけだった。

14話 戦姫クリアベル

ゾクッ

「どうかしたセイジ？」

「何か寒気が…」

「風邪？」

「いや違うと思う多分…」

誠治とルケアは朝食の後、街を散策していた。

ルケアの怪我は大した事はないのだが念のため数日の間ギルドの依頼を請けない事にした。

良い機会なので薬や保存食の補充や装備の点検にあてる事となった。

「いつもより人が多くないか？」

店に装備を預けた誠治とルケアは街の大通りを歩いているのだが明らかに人が多く混雑してる。

「うん、何だろう？」

「あのねえ、あなた達冒険者なんだから情報ぐらい仕入れときなさい」

二人して首を傾げているといつの間にか居たナナが呆れたように言

ってくる。

「あっナナ」

「今日あの戦姫が来るのよ」

「戦姫ってあのクリアベル様！？スツゴイ！！何で！？何で！？」

「何でも魔物討伐の帰りとかでルサカに滞在するらしいのよ」

「間近で見たいなあ〜」

「有名……………何だよな？」

はしゃぐルケアを余所に誠治は聞いた事の無い名に首を傾げる。

「セイジあなたまさか知らないの？」

「えーと……………はい」

「あのファマル王国の第一王女にして戦姫と言われているクリアベル・ファルマーラーを知らないの！？」

「ぎ、残念ながら」

ルケアの勢いに若干引く誠治。

「全く……………何処の田舎から来たの？」

「あははは……………」

「まあいいわ。クリアベル様はあの英雄の血を引くお方なの!!」

「……………あの英雄？」

「そこから!？」

オーレム大陸には五つの王国がある。

ファマル、グラダナ、プリージュ、レスレイン、ザラ。

遙か昔からこの五つの王国はオーレム大陸の覇権を争っていた。

1000年程前からは表立った戦争は無いものの国交は断絶しており友好とは程遠いものだった。

そんな時50年前に異変が起こる。

魔物を従え王国を襲う存在。

名をココノツ。

その力は凄まじく五つの王国を蹂躪しオーレム大陸は誰もが終わりと絶望した。

突如として現れたココノツに絶望した民達は同じく突如として現れた英雄に希望を見いだす。

名をジユウセイ。

ジユウセイは協力を拒む五つの王国を説得し手を組ませ、それぞれ五つの王国の姫達を従者として引き連れココノツ討伐に挑む。

そして見事ココノツを倒したジユウセイは五人との姫との間に子を成した。

誰もがジユウセイがオーレム大陸の王になると信じていた。しかしジユウセイは姿を消した。大陸全土を搜索したもののジユウセイの行方は解らなかった。それからオーレム大陸ではジユウセイを英雄として讃え、五つの王国は積極的に国交をし友好的な関係を今も続けている。

「……………」と、これがこの大陸に語り継がれている『英雄譚』よ」

「へー」

三人は場所を食堂に移し話している。因みに誠治に説明していたのはナナ。結局ルケアは面倒になりナナに任せていた。

「本当に知らなかったの？オーレム大陸じゃ小さな子供でも知ってる話よ」

「うーん、当たり前過ぎて話すの忘れてたんじゃないかな？」

「呑気ねえ」

「まあな」

「ん？どうやら来たみたいよ」
食堂内が騒がしくなり人が次々と外へ出て行く。

「セイジほら行くわよ!？」

ルケアに突っつかれ通りに入る。
道の両端は人で溢れているが真ん中だけがポツカリと開いている。

「来たぞ!!」

「きゃー!!」

周りから歓声上がる。

やってきたのは馬に乗る鎧姿の人が10人。

一際歓声を浴びているのは先頭に行く女性。

光に煌めく金髪に宝石のような蒼い瞳。銀に輝く鎧に身を包むその姿はまさに神話の世界から飛び出してきた戦乙女。

「見えない……」

人の壁に阻まれガツクリとするルケア。

「しょうがない、ほら」

「え、きゃあ!」

見えるようにとルケアを肩車する誠治。

「子供じゃ……あっ!?!クリアベル様ー!!」

文句を言おうとしたルケアだったがクリアベルが視界に入った途端手を振り歓声を上げる。

「あれが英雄の血を引く姫様か……」

誠治はクリアベルを見ている。

容姿は抜群に綺麗だし美しい。

しかしそれ以上に誠治が感嘆したのはその存在感だった。

まるで彼女だけにスポットライトが当たっているように輝いて見える。

「強い…」

誠治はクリアベルの実力はかなりの物だと確信する。
騎乗するその姿に隙はない。

武器は背中に背負う大剣なのだろう。本来彼女には似つかわしくない武器だが違和感はない。

「きゃあー！！クリアベル様と目が合ったあ！！」

「もう良いだろう姉さん？」

「まだまだほら追って！！」

「はいはい」

この後はしゃぐルケアに付き合わされた誠治だった。

「ふう、今日は良い一日だったわあ」

「俺は疲れたよ。姉さん見た目より重いんだな、肩が痛いよ」

「女性にそんな事言うんじゃない！！」

夕食を終えた後誠治とルケアは宿に向かっていった。

すっかり陽は落ちたが、歩く大通りはまだ賑わっている。

「やっぱりクリアベル様格好良かったなあ」
思い出しウツトリするルケア。

「姉さんてそつち系？」

「あのねえ……憧れよ憧れ。まあムサイ男より綺麗な女性の方がいいけど。あっセイジは大丈夫よ」

「へいへい」

「むー可愛げ無いわね。ここは顔を真っ赤にして照れてよ」

「次はそつするよ」

「もつ」

頬を膨らませ走り振り返る。

「セイジと会ってまだ14日なんだね。何か昔から一緒に居るみたい」

「色々あったからなあ……」

誠治がこの世界にきて二週間。

その日々の密度は元の世界とは比べ物にならない程濃くそして充実していた。

「これからも宜しくね」

「ああ、此方こそな」 お互い照れたように微笑み合う。

「そうだ、姉さん先に宿屋に戻つていてくれるか。忘れ物したみたいなんだ」

「何やってんの。解つたわ」

「早く戻つて来なさいよ」と言い残しルケアの姿は見えなくなる。

誠治は来た道を戻らず横道に入る。

すると賑わっていた大通りとは一転し其処は静寂が支配していた。暫く進み止まる。

「出て来たらどうだ？」

誠治は夕食後、ずっと後ろにある気配に気づいていた。

元の世界で動物を狩っていた誠治にはさほど難しい事ではなかった。

ルケアの方も知れないと思っていた誠治だったが気配はルケアではなく誠治に付いたままだった。

宿を知られるのは不味いと判断しこうして誘い込んだのだ。

「流石はヤマガミの者だな」

「な!？」

現れた人物に誠治は驚愕した。

服装は見覚えの無い蒼の上着にズボン。しかしその容姿と背中に背負う大剣には見覚えがあつた。

「ク…クリアベル…様？」

「そうだ」

クリアベルは大剣を背中から軽々と抜き誠治に剣先を突きつける。

「お前に聞きたい事がある」

クリアベルは獰猛な笑みを浮かべる。

「清十郎は何処に居る？」

15話 鬼ごっこ

「清十郎は何処に居る」

誠治は出掛けた言葉を呑み込んだ。

ここで「何故？」等口にしようものなら清十郎を知っている事になる。

クリアベルが清十郎とどんな関係でそして何故居場所を聞くのか解らないが、この様子からすると穏やかな理由ではないのは解る。

まして誠治自身が清十郎の孫だと知らればどんな目に遭うか……。

「え」と何の事やら私にはサツパリ……」

知らない振りをするのが一番と誠治は判断した。

フオンツ。

大剣が振られ誠治の前髪が数本ハラリと落ちる。

「私を前にして惚けるとは良い度胸をしている」クリアベルは大剣を構える。

「腕の一本でも切り落とせば話す気になるだろう？」
クリアベルの気迫が誠治に向けられる。

(不味い本気だ!?)

これは脅しではないと理解する。

選択肢は三つ。

一つは素直に話す。

しかし「清十郎はこの世界とは別の世界に居る。けど行き方は解らない」と言つて素直にそうですかで済むとは思えない。下手をすれば捕まり拷問される事も予測がつく。

二つ目は戦う。

ハッキリとクリアベルの実力は解らないが負ける事はないと誠治は思う。しかし負ければ恐らく牢に入れられ、勝つても一国の王女であるクリアベルを傷つけたとなればタダで済むとも思えない。

(選択の余地無しか)

誠治は全速力で逃げ出した。

「……………ま、待て!？」

慌てて後を追うクリアベル。

「まさか躊躇無しに逃げるとは!？」

クリアベルにしてみれば誠治が素直に話すとは最初から思っていなかった。

だが言い訳も戦いもせず逃げ出すのは予想外だった。

「貴様逃げるなど恥ずかしいと思わんのか!!」

(生憎俺は何とも思わん!!)

状況によりけりだが誠治はあまり意地やプライドは無い。

清十郎から常に平常心でいる事を徹底されていたし元々誠治自身も拘らない。

女性から一目散に逃げるのは普通の男なら躊躇うだろうが誠治はそ

れが最善の策なら躊躇無く選ぶ。

誠治は大通りに出て未だある人混みに突っ込む。

兎に角何処かで身を隠しクリアベルを撒く事にする。

誠治は再び横道に入り隠れ場所を物色する。

「何してるのあんた？」

声をかけてきたのはサリユアだった。

屋台で買ったであろう肉串をモシヤモシヤと咀嚼している。

「これから大剣を振りかざした女が俺を探しに来るだろうけど知らない振りをしてくれ！！頼む！！」

「ちょ、ちよつと!？」

サリユアの返事を待たず誠治は道端に落ちていた布を被り身を隠す。

「何なの……………つて本当に来た!？」

誠治が来た方向から大剣を持った女性が凄惨な形相でやって来る。

「あなた此処に男が逃げ込んで来なかつたか!!」

「えーとそれなら……」

何でこんな事をとサリユアは心中で愚痴りながら指を明後日の方へ向けようとする。

「これで……」

クリアベルはサリユアの手一枚一枚10万キュエルの円形硬貨をそつと握らせる。

「此処です」

指を刺したのは直ぐ側にある布切れ。

ストオオンッ！！

間髪入れず大剣を振り落とすクリアアベル。

誠治は転がりながら何とか避ける。

「サリユアー！！てんめえー！！」

「観念して清十郎の居所を吐けえ！！」

逃げる誠治を再びクリアアベルは追って居なくなる。

「ゴメンねセイジ、私お金の味方なの。さあてと美味しいお酒が飲めるわぁ」

「しまった！？」

「もう逃げられんぞ。さあどうする？」

袋小路に嵌ってしまった誠治にクリアアベルがジリジリと迫る。

「だから人違いですって…」

「匂うんだよ」

「？」

「英雄の血がお前から匂うんだ」
クリアベルは忌々しそうに言う。

「昼間大通りでお前を見た瞬間解った。お前は私と同じ英雄の血を引く者、山上 清十郎の血縁者だと！！」

「爺が英雄！？」

あまりの驚きに叫んでしまう。

「清十郎の血を引く者は王国が全て把握している。しかしお前を見つけた後調べてみるとこんな所で冒険者などしている者は居ない。つまりお前は清十郎の居る世界から来た」

「……………」

「限られた者達だけだが、清十郎が異世界から来たのは知られてい
る。さあ吐け！！清十郎は何処だ！！いや、清十郎の居る世界には
どう行けばいい！！」

「……………知らない」

「何？」

「俺は確かに爺の血縁者だ。でもこの世界には偶々来ちまっただけで帰る方法は知らない。寧ろ教えて欲しい位だ」
誠治は惚けるのを止めた。

これだけの事を相手は知っていてそれを誠治に話した。
もう知らぬ存ぜぬでは通らない。

「ふっ、どうしても喋らぬか。ならば身体に聞くだけだ」
クリアベルから強烈な殺気が誠治にぶつけられる。

「やっぱりこうなるのか…」

本当の事を話したがそれをクリアベルが信じるかは話は別。
誠治はクリアベルと戦うのを決心し構える。

「ほう…やっとその気になったか」

嬉しそうに呟くクリアベル。

（爺が英雄！？何だそりゃ！？しかもこの王女様とは親戚同士！？
あゝもう訳解らん！！元の世界に戻れたら絶対爺をぶっ飛ばす！！）

混乱状態の誠治だが今はこの状況を潜り抜けなくてはならないと頭
を振る。

「はああああ！！！」

「おおお！！！」

掛け声ともに踏み込む二人。

しかし突如誠治の身体が光だす。

「くっ！？貴様何をするつもりだ！？」

眩しさに手を翳すクリアベル。

「な、何だ！？」

突然の事にただ戸惑う誠治だが光は益々強くなる。

「うわああああ！！！」

「くじょうう！」

光が収まった後其処には誰も居なかった。

16話 帰還

まだ薄暗い早朝。

道場内では胴着姿の少女が一心不乱に薙刀を振るっていた。

「ふう……………」

飛鳥は流れる汗も拭かず溜め息を吐く。

誠治を探し歩いた飛鳥だったが当然見つからず結局清十郎の家に戻っていた。

もうすぐ学校も始まる為、実家に帰らなくてはならないのだがその気にならないでいた。

そう、此処に居れば誠治がひょっこりと現れる気がして。

そんな時道場の裏手から大きい物音がする。

この道場の周りは森であるため野生の鹿や猪、時には熊等が出没し餌を求め道場を荒らす事がある。

飛鳥は薙刀を握り締め道場の外から回り込む。

「あ……………」

飛鳥はそれを確認した後固まってしまふ。

熊をも余裕で倒せる飛鳥ならそこにどんな動物が居ようとこんな反応はしない。

居たのは人だった。

しかも見覚えがある所か、この二週間必死に探し求めた愛しい人。

兄、山上 誠治だった。

「あたたた……」
打ったのか痛む頭を抑え誠治は起き上がる。
周囲を確認すると森で目の前には建物の壁。
この風景に誠治は見覚えがあった。

「まさか……」

誠治は立ち上がり周りを見渡す。
見れば見るほど見覚えがある風景を見るうちに確信した。

「戻ってきたのか……！？」

人の気配に振り向く。

其処に居たのはよく知る少女だった。

「あ……すか？」

「お……兄……様？」

最初ポカンとした表情だった飛鳥は徐々に目に涙を浮かべ泣き顔となる。

「お兄様……」

「うおっと!？」

飛びついて来た飛鳥を受け止める。

「お兄……様……黙って居なくなるなんて酷いじゃないで……すか……」

誠治の胸で泣きじゃくる飛鳥。

「まあその……悪かった」

誠治は飛鳥の背中をさすりながら謝る。
居なくなったのは誠治の意志ではないが心配させたのは事実。妹を
これほど泣かせてしまっただけは兄失格だなと誠治は悔いた。

「おっと」

勢い余って誠治は地面に倒れ飛鳥は覆い被さるような形になる。

「飛鳥ゴメンな…」

「お兄様、私ずっと後悔してたんです」

「ん？何を……………って飛鳥お前本当に何を！？」

いつの間にか飛鳥はマウントポジションを取り誠治の身動きを封じていた。

「もう逃がしません。一生涯…」

「あの…飛鳥さん、目が怖いんですが」

「ですのでお兄様。私を貰って下さい」

そう言っただけで胸を脱ぎ出す飛鳥。

下着姿になった飛鳥はその豊満な胸を誠治に押し当て顔を近づける。

「お兄様……………ずっと好きでした…いいえ愛しています」

「ちよい待て！！本気で待て飛鳥！！」

飛鳥の両肩を抑え必死に抵抗する誠治。

「お兄様、欲望のまま私の身体を貪って下さい」

「おま！？何処でそんなセリフ覚えた！！」

何とか身体を引き離そうとする誠治だが中々出来ない。

単純な力なら誠治の方が上なのだが飛鳥の執念と言うか情念がその差を補っていた。

「な……何て力だ」

「さあお兄様！！禁断の愛欲の世界へ！！」

もう駄目だと誠治が諦め掛けた時、飛鳥は突然飛び退く。

すぐさま飛鳥がさつきまで居た誠治の上をビュンツと空気を切る音が通過した。

「何をしている！？破廉恥な！！」

声のする方を見るとクリアアベルが大剣を構え顔を真っ赤にしていた。

「何ですかアナタは？私とお兄様の邪魔をして」飛鳥は冷たい視線をクリアアベルに向け薙刀を手に取る。

「ふん！お前のような変態に用事はない。あるのは其処の男だ！！」

（あちゃー。彼女も一緒に来ちゃったのか）

大して好転していない事態に頭を抱える誠治。

寧ろややこしくなった。

「貴様一体何をした！！此処は何処だ！！」

分けの解らない事態にクリアアベルは錯乱状態の様子だ。

「俺にもよく解らんのだが…」

「まだしらを切るかぁ!!」

問答無用とばかりに斬りかかって来るクリアベル。

ガキイイツ!!

「くっ!?!」

クリアベルの大剣は誠治に届く前に飛鳥の薙刀によって止められる。

「こんな物で!!」押し切ろうとクリアベルは力を籠めるがビクともしない。

「はぁあ!!」

逆に飛鳥がクリアベルを押し返す。

「邪魔をするな!!」

「……………アナタですねお兄様を誑かし連れまわしたのは」

「何?」

「飛鳥お前何言って…」

訝しげに飛鳥を睨むクリアベルに啞然とする誠治。

「お兄様は光です。そしてそのお兄様に群がる虫を叩き落とすのは私の役目」

飛鳥は薙刀を構え無表情でクリアベルを見据える。

「貴様私を侮辱するか……………」
クリアベルも大剣を構え飛鳥と対峙する。

「でえやああー!!」

「はああああ!!」

「止め…!!」

二人の間に割って入ろうと駆け出す誠治。
しかし間に合わず二人がぶつかり合う寸前、

「そこまで!!」

その声に二人は金縛りに遭ったかのように動かなくなる。

「全く、朝から何をしとるんじゃ？」

其処には顎を撫でながら笑う清十郎が居た。

17話 対面

「ん？おお、帰ってきたか誠治」

清十郎は誠治の存在に気づき声を掛ける。

が、孫が無断で二週間も行方不明だったと言うのに余りに普通の態度。

「爺いい！！」

誠治は駆け清十郎に殴り掛かる。

言いたい事は山ほどあったが兎に角一発殴らなくては気が済まなかった。

「ほっほっ良い動きじゃ、やはり百の稽古より一の実戦じゃな」

二週間前とは見違える動きに清十郎は感心する。

「じゃが……………」

殴り掛かって来た誠治を僅かな動きで避け、頭を掴み地面に押し付ける。

「攻めが正直すぎるのう」

「てめえこの！！何企んでやがる！！」

「それは後々話してやるからもう。飛鳥よ朝食の準備を頼みたいんじゃが」

「解りました」

飛鳥は手早く胴着を着ると行ってしまふ。

「そこのお嬢さんも一緒にどうかかな？遠慮は無用ですよ」
誠治にクリアベルを居間まで案内するようにと言つと清十郎も居なくなる。

「くっ…はあ！！」

クリアベルは膝を地面につけ、苦しそうに息を吐く。

「な……何だ奴は……この私が全く動けなかった」

「ああ…爺のあれはキツイから」

清十郎は氣で相手を押さえつけたのだ。

清十郎曰わく氣で相手の氣を押さえつける事で自由を奪うのだと言
う。

誠治自身、何度もやられている。身体全体に重りを付けられている
ような感じなのだ。

「取り敢えず飯を食わないか？多分その後全部説明してくれると思
うから」

「……………解った。だが納得いかない時は……………」
クリアベルは大剣を持つ手を強める。

食事を終え居間には清十郎が上座に座り対面に飛鳥、誠治、クリア

ベルの三人が並んで座る。

居間は如何にもな和室で畳に、壁には掛け軸と壺が置かれている。見たことの無い部屋にクリアベルは戸惑いオロオロし、その様子を見て誠治が笑ってしまい睨まれる場面があったりした。

「さて、まずは自己紹介といくかの」清十郎は三人を見渡す。

「じゃあまずは俺から。山上 誠治21歳」

「私は妹の山上 飛鳥です」

「……クリアベル・ファルマーラー」

飛鳥は無表情、クリアベルは憮然とした様子で自己紹介をする。

(胃が痛い……………)

場の空気の悪さにお腹を抑える誠治。

「僕は山上 清十郎じゃ……」

「貴様が清十郎か!？」

清十郎が名前を言った直後、クリアベルは清十郎の襟元を掴み壁に押し付ける。衝撃で掛け軸は落ち、壺は倒れる。

「貴様の……貴様のせいでお婆様は!！」

クリアベルは絞り出すように言い放つ。

「ファルマーラー……なる程、嬢ちゃんはマリアベルの血族かの」

「そうだ!!--私はお前に捨てられたマリアベル・ファルマーラーの孫だ!!--」

「ふむ。取り敢えず話をせんかの？納得出来なければ後で儂を煮るなり焼くなり好きにしてよいぞ」

「……………良かるう。しかしその時は覚悟しておけ!!」
クリアベルは数秒清十朗を黙って見た後、戻り座る。

「爺、飛鳥は席を外させるべきじゃないか」
この件に関して飛鳥は無関係。

清十朗の話を聞けば巻き込まれる恐れがあると誠治は思ったのだ。

「だそうだが…どうする飛鳥？」

「聞きます。お兄様の身に何が起きているのか知りたいです」
清十郎の問いに飛鳥は躊躇なく答える。

「しかし飛鳥」

「お兄様、私だけ除け者は御免ですよ？」

「はあ…解ったよ」

本当は飛鳥を関わせたくはない誠治だが昔から頑固なのを身を持って知っている為諦める。

「さてどこから話そうかの……………そうあれは50年前のある日……………
……………」

閑話 誘惑大作戦 1

「ナナ!!」

「朝からどうしたの？」

まだ人もまばらな早朝のギルド。

ルケアが血相を変えてナナに詰め寄ってきた。

「セイジが帰って来なかったの!!」

「ふうん……で？」

「無断外泊よ!!」

「セイジ君も良い歳なんだからそんな事もあるでしょ」

「そんな事って？」

「女」

「……………女あ!!」

「そつ。男なんだから発散したくなるわよ」

「そんな、家の子に限って……………」

「あなたお母さんみたいよ」

「ふ、不潔よ!!不潔!!」

顔を真っ赤にして騒ぎ立てるルケア。

「あのねえ……セイジ君の事なんだと思ってるの？」

「そ、それは……」

「男が女に興味持つのは当たり前だからしょうがないじゃない」

「だって、セイジが他の女の人となんて……」

「ならあなたがセイジ君を満足させたら？」

「わ、私!？」

「そっ」

「でも私は……」

「やっぱりあなたみたいなのチンチクリンじゃ無理かしら?」
「ニヤリとするナナ。」

「出来るわよ!! やってやるうじゃない!」
「そう言い残し走り去るルケア。」

「ふふふ、どうなるかしら……」

誠治がこの世界に居ない事をまだ知らないルケアだった。

18話 年寄りの昔話は…

「あれは50年前のある日、場所は此処じゃった。その頃はまだ道場はなくて掘つ建て小屋があるだけでの。雨漏りが酷くて…」

「爺、話が逸れてる」

「おお！？済まん済まん。それである日、朝靄の中森を歩いていたら………」

「ん？何だ此処は？」

清十郎は立ち止まり辺りを見渡す。

森は森なのだが雰囲気が違う。

何処かピリピリと気配が纏わりつく。

「グウワアアアー！！」

それは突如現れた。

熊に似たその獣は二本足で立ち上がり清十郎を威嚇する。

グルベアーである。

「ほうこれは面妖な熊だ」

清十郎は恐れる所か興味津々にグルベアーを見る。

世界各地を廻っている清十郎はグリズリーから果ては白クマまで見て来た。

しかし目の前に居る熊は見た事も聞いた事もないものだった。

「グウルワー！」

グルベアーが前脚を振るい、強靱で鋭利な爪が清十郎に襲い掛かる。

「おっと」

だが清十郎は少し動いただけで避けてしまふ。

「さてどうするか。無闇に殺生はしたくないのだが」

「グウガ!?」

するとグルベアーの動きは止まる。

暫しの後グルベアーの肩から斜めに線が現れ地面に落ちる。

「これは見事」

清十郎はグルベアーの死骸を見て感嘆する。

刃物で斬られているようだが骨や内臓は潰れておらず切り口が異様に綺麗なのだ。

「お前は何者だ」

透き通るような声に清十郎はグルベアーの死骸から目を離す。

そこには自分の身の丈程もある大剣を清十郎に構えている女性が居た。

「それがマリアベルとの出逢いじゃった」

「お婆様……」

クリアベルは自分の祖母の話に息を飲む。

グルベアーは強固な毛と皮で身を守る魔物。

それを一振りで真つ二つにした。

クリアベルにはまだ出来ない芸当。

それを成す祖母を誇りに思う反面、悔しさに顔を歪ませる。

「マリアベルはいい女じゃったなあ。美しいのは勿論じゃが、くるさがまた堪らんくてのう」

「爺、また話が逸れてる」

「ほっほっほっ済まん済まん。後で解った事なのじゃがこの道場の建っている場所は何やら歪みがあってあちらの世界に繋がっておったのじゃ」

「お爺様、あちらの世界とは？」

「異世界だよ」

飛鳥の疑問に誠治が答える。

「異世界？異なる世界と書いて異世界ですか？」

「ああ」

「よく漫画やアニメ等で聞く異世界ですか？」

「そつだよ」

「……………お兄様。私はお兄様がどんな趣味や妄想をしても心は変わりません」

「お前な……………」

優しい表情で飛鳥は誠治の手を握る。

「まあ、信じるのは難しいじゃろ」

「冗談ですよ。私はお兄様を信じていますから」

「そりゃどうも」

「ええい！！話を進めろ！！」

兄妹の掛け合いに苛ついたのか怒鳴るクリアベル。

「では進めるかのう。何とかマリABELには敵ではないと信じて貰えたのじゃ。しかしその頃は戦乱の真っ只中での……………」

「何時までこんな事をするつもりだ」

「……………」

清十郎とマリABELは小高い丘から周りを見下ろしている。

清十郎がマリABELと出逢い2ヶ月。

腕を認められた清十郎はマリABELの側近として戦いに参加していた。しかし傷つき傷つける毎日。

既に各地ではココノツという得体の知れない存在が猛威を奮っている。

滅ぼされた街や村は両手で数え切れない程出て、国自体を脅かすも時間の問題だった。

しかし各国は未だに大陸の覇権を争う始末。

それ所ではないというのに。

このままではココノツにこの大陸は蹂躪されてしまう。

「儂が全ての国を説得する」

「待て清十郎！！」

マリABELは清十郎の腕を掴む。

今、各国は戦争中。

そんな事をすれば命の保障などない。

「離せマリABEL。誰かがやらなければならないんだ」

「ならば私も連れて行け。お前だけでは話すら聞いて貰えんぞ」

「しかしファマル王国の第一王女であるお主に何かあったら……」

「今更だ。それにお前は私の側近だ、離れるのは許さんからな」

「ふっ、解りましたよ王女様」

「解ればよいのだ」

二人は笑い合った。

「それから何とか停戦させてのう。マリアベルを含む5人の姫と一緒にココノツを倒したのじゃ。めでたしめでたし」

「終わり!? 端折りすぎじゃないか!?!」

「詳しく話してもよいが1日では終わらんぞ」

「そんな事より何故お婆様を……いや! その5人の姫達を置いて居なくなつた!?!」

「婆さんが……怖くてのう……」

清十郎は遠い目をする。

3年前に他界した清十郎の妻、妙たえは穏やかで優しい人柄だった。

「妙婆ちゃんなあ……」

誠治は思わず苦笑いする。

確かに誠治や飛鳥には優しい祖母だったが清十郎には異様に厳しく、

見知らぬ女性と話しているだけで怒っていた。
喧嘩もよくしていたが妙が一方的に清十郎を投げ飛ばしていた。

「では貴様は妻が怖くて5人の姫を捨てたと言っのか…」
クリアベルは怒りで小刻みに震える。

「まあ、簡単に言えばそうじゃの」

「解った。ならばその首を落としお婆様の土産にしてくれる…！」

「待てクリアベル…！」

清十郎に斬り掛かろうとするクリアベルを誠治は羽交い締めして止める。

「離せ誠治…！この肩を斬らせろお…！」

「斬るのは良いが少し待ってくれ…！俺も聞きたい事がある。おい爺…！蔵で見つけた黒い本は何だ…！」

黒い本。そのせいで誠治は異世界に飛ばされてしまった。

「あれは向こうの友人に作って貰った『簡易召喚の書』と、言うての。お前さんに蔵の掃除を頼んだのはそれを見つけさせる為じゃよ」

「だろうな。で、あの本に何を仕込んだ？妙な図を本当なら描くわけがないのに描きたい衝動に掻かれたんだが」

そう、あの時誠治は4時間以上も費やし本にあった図を描いた。本来こんな胡散臭い物にそんな時間を費やすのは明らかに可笑しかった。

「あの本には『魅了』^{チャーム}の魔法を掛けて貰ったので、描かずにはいられなくしたんじゃないよ」

「何でそんな事した…」

「最近お主弛んでいたからの。環境を変えてやろうと思ったんじゃない」

「死ぬ目に遭ったんだが…」

「ほっほっほっ簡単に死ぬような鍛え方はしとらん。それにあの魔法陣は二週間経てば強制的に帰還する仕組みになっておるからの」

「……………」

誠治はクリアベルを解放する。

「クリアベル、コイツの止めは任せる」

「ああ任された」

並の者なら気を失う程の殺気を出しながら清十郎に詰め寄る誠治とクリアベル。

「やれやれ。最近の若者は堪え性がないのお」

「お前が言うな!!」

清十郎に襲い掛かる誠治とクリアベル。

「ふむ。では稽古をつけるかの」

数分後。

ぼろ雑巾のように倒れている誠治とクリアベル。

「攻めが雑じゃのう」

「ば、化け物……め……」

「くそ……まだ駄目か……」

そう言い残し誠治とクリアベルの二人は気を失う。

「飛鳥、済まんが二人を休ませといてくれ」

「お爺様」

「ん？何じゃ？」

「何を企んでいるのですか？」

飛鳥はジッと清十郎を見据える。

「これ以上お兄様が危険な目に遭うなら私も黙ってませんよ？」

「さてのう……」

清十郎は目線を外し惚けた。

19話 戦姫の心

「所で爺。向こうじゃシュウセイって言われてるが、ありや何だ？」

「あだ名みたいなもんじゃよ。清十郎と言う名前は向こうでは馴染まないからの、清と十をセイシュウひっくり返して名乗っておったんじゃ」

「下らねえ」

翌日。

誠治は普通に清十郎と朝食を取っていた。
昨日程度なら日常茶飯事な為、後腐れは無い。
しかし…

「どうだった飛鳥？」

「返事ありませんでした」

誠治の問いに力無く首を横に振る。

清十郎に返り討ちにあったクリアベルは客間に引っ込んだまま出て来ないでいた。

「ショックだろうな……自分の祖母を見捨てた屑に叩きのめされたから」

「本当です、屑なお爺様に傷物にされてしまった訳ですから」

「うづうづ…孫が苛める」

「爺、朝食は食べたろ？」

「不憫ですお爺様」

「僕はまだ呆けとらん！！」

孫の口激に珍しく声を荒げる清十郎。

「に、しても飛鳥。お前もうクリアベルに怒ってないのか？」

朝、いち早くクリアベルを心配し客間まで朝食を持って行ったのは飛鳥だった。

昨日初めて会った時はかなり険悪だった。

「はい。クリアベルさんは敵ではありませんし」飛鳥は当初クリアベルの事を『誠治を連れ回した恋敵』という認識だったが話を聞いた後はクリアベルは誠治に好意は持っておらずしかも遠いとは言え血も繋がっている。

言わば親戚。

となれば、敵対する理由がなかった。

飛鳥は身内には優しいのだ。

クリアベルは布団の中で膝を抱えている。

自分が尊敬してやまない祖母マリABELを捨てた英雄。

マリABELはその英雄の話をする時、懐かしそうにそして悲しげな顔になる。

祖母にそんな表情をさせる英雄がクリアベルは子供の頃から嫌いだった。

だからクリアベルは剣を持った。

英雄などあなたに比べれば大した事はないと何時か言って貰いたく。

今にしてみれば、あれは子供の嫉妬だったのだろうとクリアベルは思う。

何時しか周りは『戦姫』とクリアベルをそう言い始めた。自惚れるわけではなかったがクリアベルも自信があった。

しかしマリABELはクリアベルを認めなかった。

「英雄はあなたよりずっと強い」と。

クリアベルは落胆しある決意をする。

英雄を見つけ出し自分が倒す。

だが英雄は50年前に居なくなつてから全くの行方知れず。

必死に探し一つの手掛かりを得る。

それは昔英雄に助けられたと言うバンパイアからの情報だった。ルサカに英雄の血を引く者がいる。

クリアベルは王都に帰る予定を変更しルサカに補給という名目で滞在する事にした。

その者は直ぐに解った。

大通りの端で女の子を肩車している青年。
明らかに存在感が違う。この者なら知っているに違いないと確信した、英雄の居場所を。

それから一人になった所を追い詰めるが中々話さない。

それまで怪我をさせるつもりはなかったクリアベルだったが苛立ち、本気で斬り掛かるがその瞬間眩いばかりの光に包まれ意識が途絶える。

目が覚めると何故か半裸の女性が馬乗りでその男に迫っていた。

羞恥で混乱したクリアベルはその女と対峙した。

その時だった。

老人の声がしたかと思ったらクリアベルの体は動かなくなった。まるでいきなり体重が何倍にもなった感覚。

誠治という青年の話であの老人がやったとの事。

一体あの老人は何者なのか？

そして直ぐに解った。その老人こそクリアベルが探し求めた英雄清十郎だった。

クリアベルは清十郎の話に怒っていたが、反面歓喜していた。

この老人を倒せれば自分は祖母マリアベルに認められると。だが全く歯が立たなかった。

弱い自分。

残ったのはそれだけだった。

「開けるぞい」

軽いノックの後襖がスーと開き清十郎が部屋の中に入る。

クリアベルの姿は布団に隠され見えない。

「ちよいと部屋を出んか？」

「……………」

「面白い物見せてやるぞい」

「……………」

「そうか残念じゃなあ」

無言を拒否と受け取り清十郎はわざとらしく溜め息を吐く。

「せっかくマリアベルの剣技を見せようかと思ったんじゃが……」

ガバツ。

その言葉を聞いた途端クリアベルは布団から出て起き上がる。

「着いてくるじゃろ？」

外に移動した二人。

清十郎は地面に鉄の杭を立てる。

取り出したのは木刀。

「さて、久し振りじゃが……」
木刀を腰に添え身構える。

水平に振るう。

空気を裂く音だけがした後、鉄の杭は真っ二つに斬れ落ちる。

「ッ!!」

「まあこんなもんじゃろ」

驚きで目を見開くクリアベルとは対照的に清十郎は木刀で肩を軽く叩く。

「み、見せてくれ!!」

清十郎から引つたくるように木刀を取り観察する。

しかしどう見てもただの木刀でとても鉄を斬れるとは思えない。

「クリアベルは『氷刃』と言われていての、斬られた者は痛みより先に冷たく感じたそうじゃ」

「これが……」

「お主クリアベルに認められておらぬな？」

「……」

返事はしないが顔を歪ませるクリアベル。

「昨日お主の剣を見たが力に頼り過ぎじゃ。あれではクリアベルは認めんよ」

「五月蠅い!!」

クリアベルは木刀を叩きつける。

「貴様に何が解る!!お婆様を捨てて居なくなった貴様に!!」

「教えても良いぞ?」

「何?」

「これが使えれば今より遥かにマシになるぞ」

「何のつもりだ。私は貴様の首を諦めてはいないのだぞ」

「ほっほっほっ。今のままではお主が儂の首を落とすより寿命が先じゃよ。で、どうするか?」

「抜かしたな……ならばその技を覚えて永久に首と胴を別れさせてくれる!!」

「元気が良いのう、なら早速修行といくかの」

「まずは精神を落ち着かせるぞい」

道場に場所を移しクリアベルが座禅を組み背後に警策を持った清十郎が佇む。

「色々やる事はあるがお主は少々情緒不安定じゃ。まずはそれからじゃな」

「誰のせいだと!?!……………」

バシン!!

「うきや!?!…」

肩に浴びせられた警策にのたうち回るクリアベル。

「ほりゃ、言ってる側から」

「覚えていろよ貴様……………」

バシン!?!バシン!?!

「くきや!?!…ひきや!?!…」

それから暫くの間、道場から警策を叩く音と悲鳴が鳴り響いた。

20話 これから…

「飛鳥、道場の方が騒がしいけど何かあったのか？」

「お爺様がクリアアベルさんを鍛えるそうです」

「……………あの爺、何のつもりだ？」

「解りませんが取り敢えずクリアアベルさんの事はお爺様に任せれば良いかと」

「それもそうか……………」

誠治は携帯に目を向ける。

それには飛鳥や大学の友人達からの着信やメールが溜まっていた。

「心配かけたな…」

自分せいではないとは言え心配を掛けた事に心を痛める誠治。メールを確認していくとある所で目が止まる。

「信彦…？何だこのメール、肩が肩がとしか書いてないぞ？」

「あっ」

飛鳥が思い出し思わず声を上げた。

此処はとある喫茶店。

信彦、京子、香の三人はある人物に呼ばれ集まっていた。カランカランと扉の鈴が鳴り三人が目を向ける。

「ゴメン、遅れた」

手を合わせ謝りながら誠治が店内に入る。

「誠治君!!」

香が席を立ち誠治の側まで走り寄る。

パンツ!!

「何処に行ったの!? 心配したのよ!!」

誠治の頬を平手打ちする。

叩いたのは香なのに泣きそうな顔になっている。

「ゴ、ゴメン…」

突然の事に戸惑うが何とか言葉を出す。

普段香はどちらかと言えば強気でありこの様な表情は見せない。

「ほらほら二人ともそんな所に居たら邪魔よ」

京子がそんな二人を席へと連れて行く。

信彦の隣に誠治、京子の隣に香が座る。

店員に注文し来た飲み物で一息着く。

「落ち着いた香?」

「うん。ゴメンね誠治君叩いたりして」

「気にしないでいいよ。俺が悪いんだし」
実際誠治は不快に感じては居なかった。寧ろそこまで心配してくれた事に不謹慎と思いつつ嬉しかった。

「所で誠治。お前何処行つてたんだよ？」
信彦がアイスコーヒの氷をかじりながら聞いてくる。

「あー……実は異世界に召喚されて冒険者してた」

「……………ぷつ、やだ誠治君」

「お前嘘つくならもつと考えろよ」

「へえ〜そんな冗談言つんだ誠治君って」
香、信彦、京子がそう言つて笑い合う。

誠治は心中で「そりゃ信じないわな」と呟き付き合つて笑う。

「本当は爺から逃げ続けてね。連絡したかったんだけど携帯を忘れてて」

「二週間もか!？」

「ま、まあな」

「まあお前んとこの爺さんは規格外だからな」

「そう言えばこの前誠治君のお爺さんが銀行強盗をデコピンだけで捕まえてたのTVで見た!!」

「私も見たよ。警察から表彰されてたっけ」
誠治の言った嘘の内容はあまりにお粗末な物だが三人はアッサリ信じた。それは清十郎が周りから非常識な存在と認識されているからだ。

「本当にゴメン!!」

誠治は立ち頭を下げる。

「もういいよ誠治君」

「そうそう」

「そつだ今度はスキー行こうぜ!!」

「信彦にしてはいい案!!スケベで頭の中埋まってるのに」

「酷いよ京子ちゃん…」

それから四人はたわいの無い事を話した。
たった二週間会って無かったただけなのにとても楽しく充実した時間を誠治は過ごした。

四人は喫茶店を出てバス停に向かっていた。

本当ならまだ余所の場所で遊びたかったのだが誠治が帰る清十郎の家にはバスがあまり通らず、後15分程先の時刻15時30分のバスが今日の最後なのだ。

バス停に着き話しているとバスが来た。

「じゃあな」

「誠治君!」

バスに乗り込もうとする誠治を呼び止める香。

「今度いつ会えるかな?」

「うん、ちょっと用事があるから……時間が有ったら連絡するよ」

「……待ってる」

「あ、ああ」

顔を赤らめる香に照れてしまい目線を逸らす。

その先に無意味にニヤニヤする信彦と京子を見て少し苛ついた誠治だった。

「用事が……」

走り出したバスの中で一人呟く。

明日から誠治はまた異世界に行く予定だ。

今日友人達と会い改めて自分はこの世界の人間だと実感した誠治。しかしだからと言って向こうの世界でナナルケアといった人達と関わり、たった二週間とは言え縁も出来た。その縁をもうこれっきりとするのはあまりにも忍びない。

詳しい話は聞いてないが清十郎の素振りからすると異世界とこの世界は往復出来そうだ。

だがずっと行ったり来たりするのモ……

「まあ、取り敢えずは姉さんへの言い訳考えなきゃな」

「お帰りなさいお兄様」

玄関先を掃除していた飛鳥が出迎える。

「ああただいま。爺は居る？」

「居ますがまだ道場です」

飛鳥は道場を指差す。

「そつか…なあ飛鳥」

「はい？」

「行けるようならまた明日から異世界に行く」

「解りました。お気を付けて」

「やけにアツサリしてるな。てっきり一緒に来るって言い出すかと

…」

「寂しいんですかお兄様？」

「馬鹿言え」

飛鳥はクスリと笑い、

「お兄様はやれる事をやって下さい。私はお兄様が帰ってきてくれれば充分です」

「飛鳥…」

「それに待ってる女の方が殿方の評判は良いそうです」

飛鳥の想いに感動した誠治だったがすぐガツクリとうなだれる。

「疲れるようですからお風呂に入って来たら如何です？もう沸かしてありますし」

「そうするわ……でもその前に…」

誠治は何故か裏の物置に行き、荷造り用の紐を持ってくる。

「飛鳥」

「お、お兄様何を!？」

誠治は紐を飛鳥に絡ませていく。

「済まん飛鳥、これは俺の我が儘だ」

「そんな!?!お兄様酷いです!!あ…あ…あ…!!」

「ふう…この時間に入る風呂は気持ちいいな」
外はまだ明るく夕日が風呂場の窓から差し込む。

「しかしまさか風呂入るのに妹を縛り上げる羽目になるとは」
身の危険を感じた誠治が飛鳥を紐で縛ったのだ。

「とは言え少しやりすぎだったかなあ…」

「そうですね、まああれがお兄様の癖ならば受け入れるのもやぶさかではありませんが」

「!!!」

誠治はギョツとし風呂の扉を見る。

そこにはバスタオルを体に巻きつけた飛鳥が立っていた。

「飛鳥!?!お前どうやって!?!」

「こんな事もあるつかと剃刀を仕込んでましたので」

「こんな事って……………」

しれつと言いつつ飛鳥に頭を抱える誠治。

「と、とにかく出てって……………いや俺が出る!!!」

「妹が兄の背中を流しに来ただけですよ?」

「だからってその恰好はないだろ!!!」

「お兄様、まさかこの下が裸だと思っているのですか？」

「え？」

「やですわお兄様ったら」

「そつだよな、そんな訳ないよな」

「うふふふ」

「あははは」

「正解」

ハラリとバスタオルを落とす。

そこには一糸纏わぬ飛鳥の姿が。

「うおわああー！！早く隠せ！！」

手で目を覆い慌てまくる誠治。

しかし飛鳥は落ち着いている。

「据え膳喰わぬは男の恥。さあお兄様ご覚悟を…」

「止めてくれ！！頼む飛鳥…」

一歩一歩誠治の居る湯船に迫る飛鳥。

オロオロし怯える誠治。

例えるなら追い詰められたウサギに今にも襲い掛からんとするライオン。

少々可笑しい気もする例えだがそれだけ誠治は追い詰められていると言つ事。

「飛鳥……」

意を決したような顔つきになり水面に手を付ける。

「悪いが足掻かせて貰うぞ」

誠治は拳を湯船に叩きつける。

その瞬間、爆発したかのように湯柱が上がる。

(今だ!!!)

湯が飛鳥の姿を隠したのを見逃さず誠治は素早く湯船から出て風呂場から脱出するのに成功する。

「お兄様!!!お兄様!!!」

風呂場からする飛鳥の声を背に受け誠治は安堵した。

誠治がしたのは氣を込めた拳を水面に叩きつけただけ。ただ威力が有りすぎた為あの様になったのだ。

異世界に行く前の誠治では無理だったろうが、今の誠治はあの頃より氣の使い方が上手くなっていた為、出来た事だった。

「はあはあ……何とか逃げれたか……」

「貴様……」

「え?」

不意にした声に顔を向けるとそこには疲労困憊の様子ながら憤怒の表情をしているクリアベルが居た。

「今日の私はすこぶる機嫌が悪い………覚悟しろ」
クリアベルは木刀を構え誠治に襲い掛かる。

「せめて服を着せさせてくれえ！！」

暫くの間クリアベルに追いかけて回された裸の誠治。
夏だったので風邪を引かなかったのが唯一の救いだっ
た。

閑話 誘惑大作戦2

誠治が裸で逃げ回っている時より1日遡る。

売り言葉に買い言葉でギルドを勢いよく出たもののルケアは途方に暮れていた。

「どうしたものかしら…」

誠治を誘惑するのは良いがルケア自身何をしたら解らない。

ルケアの周りでそんな事を相談出来るのはナナぐらいしか居ない。

ナナはその美貌とスタイルの良さから冒険者に言い寄られる事が多い。

「あっ！？あの人が居た」

「たのもおー！！」

「あら、いらっしやい」

ルケアが訪れたのは、日用品から冒険者が使う物まで揃えているルサカでも指折りの道具屋だった。

ここはルケアの行き着けてもありません店主であるミューハは顔見知りであった。濃紫の長い髪、切れ長の目に厚い唇は大人の女性の魅力をも

醸し出している。

「ミュー八さん相談があるの!!」

「あらあらどうしたのルケアちゃん」

頬に手を当て首を傾げるミュー八。

優しく微笑むその姿は娘を心配する母親のように見える。

だがそんな歳は離れておらずミュー八が3つ年上なだけ。それを知った男連中は腰を抜かすが。

「あのね例えば、例えばなんだけど。気になる男の人が居て、その人の気をどう引けばいいかな？」
そのまま話をする訳にも行かずミュー八は店を一時閉めお茶を出した。

「うーん、そうね……その子がどんな子が教えてくれる？」

「うんとね……背が高くて格好いいんだけど、ちょっと抜けてて……」

「ルケア、女の子の方を教えて欲しいんだけど？」

「え?…ああ!??そ、そうね!??えつとお……」

顔を真っ赤にし慌てながらルケアは話す。

支離滅裂になりがちなルケアの話をもミュー八はジックリと聞く。

「それでその子はその男の子の気を引いてどうしたいのかしら？」

「え？どうしたいって？」

「男と女の関係になりたいかって事」

「あ、う……………」

ルケアは口をパクパクしながら黙ってしまふ。

「なりたいたんならいくらでも方法はあるわよ？例えば飲み物にこの媚薬を3滴垂らして飲ませればイチコロだし」

「び、媚薬！！」

「そう。でも一瓶300万キュエルするけど」

「300万！！……………でもお金出せば買えるの？」

「いいえ、媚薬は取扱い禁止物よ」

「ほっ」

「建前はね」

「あの……………建前？」

「ううん、何でもないわよ」

「う、うん」

片目を瞑りウインクするミュー八にコクコク頷くルケア。

今までの付き合いからこれ以上追及してはいけないと知っているルケアは素直に引き下がる。

「まあでもこんな物使わなくても身体一つあれば充分よ」

「でも私……じゃなくて、その子は身体に自信が無くて……」

「関係ないわよ？ 迫り方次第でどうにかなるし」

「そうなの！？」

「でもねルケア、その子はその男の子とどうなりたいの？」

「どづって……」

「関係を持つのを悪いとは言わないわ、そうしないと解らない事もあるし。でもねもつとハッキリ自分の気持ちを知ってからでも遅くないわよ？」

「自分の気持ち……」

ルケアは俯きジッと考える。

「ハッキリとは解んない。でも……」

ルケアはバツと顔を上げる。

「ありがとうミューハ！！」

そう言っつて店を後にし駆け出した。

「どづいたしまして」

ミューハは開けっ放しになっている扉に向かって言った。

21話 勘違いと再会

「ごごじゃよ」

清十郎は鍵を外し、この家には不釣り合いな洋風の扉を開ける。すると扉の中は真っ白な空間があるだけ。

「本当にこの先は異世界か？これを機に俺を亡き者にする気なんじゃないのか爺？」

「可愛い孫にそんな事する訳ないじゃろ？」

「そのニヤケ面を引っ込めろ」

翌日。

誠治は異世界に戻る為一室の前に居た。

誠治の考え通り異世界に再び行く手段はあった。

其処は清十郎の家の中にあった。

昔からこの家に来ていた誠治と飛鳥はその部屋の存在を知ってはいたが、まさかそれが異世界に通じていると思う筈もなかった。

「で、爺。戻る時はどうしたらいいんだ？」

「これを使えばよい」

清十郎は見覚えのある黒い本を誠治に渡す。

捲るとこれまた見覚えのある魔法陣らしき図が描かれている。

「またこれか……」

誠治はウンザリした様に呟く。

「ほっほっ、まあそう言うでない。この扉から行けば二週間で強制帰還される事はないからの。帰るにはその本しか手段はないからの、無くすでないぞ」

「解ってるっつの」

「お兄様」

「お、おお。何だ飛鳥!？」

昨日の事を思い出しつつい後退りしてしまう。

「無事のお帰りをお待ちしています」

そんな誠治に気づいているのかいないのか飛鳥はニッコリと微笑む。

「あ、ああ。ありがとな」

「誠治、私は暫くこの世界に居る。それでこの手紙をお婆さまに渡しといてくれ」

そう言いクリアベルは一枚の手紙を誠治に渡す。

「ああ。解った」

「お前には迷惑掛けた。だが安心して良い、今度お前が戻ってくる頃には清十郎の頭と胸はサヨナラしている」

「うん、期待している」

「そう言う話は本人が居ない所でしてほしいんじゃないが…」

ガツチリ握手をする誠治とクリアベルを悲しげに呟く清十郎。

「そんじゃ行ってくるわ」

「ふむ。達者での」

「お兄様、身体磨いてお帰りを待ってます!!」

「磨かんでいい!!」

誠治の姿は白い空間に溶け込んでいった。

「お兄様……」

飛鳥は名残惜しそうに扉の向こうを見つめている。

「さてと……」

そんな飛鳥を余所に清十郎は懐から一羽の小鳥を取り出す。雀に似ているが長めの嘴に銀一色の体毛。

「それはレチルバード？」

クリアベルが訝しげに見る。

レチルバードは通称伝達鳥と言われる鳥。

小柄ながら体力があり頭が良い。何よりその銀の体毛は光を反射し対敵から姿を隠す。

「ほれ頼んだぞ」

清十郎は嘴に紙を紐状にした物を縛り付け飛び立たせる。レチルバードも白い空間に消えていった。

「お爺様今のは？」

「内緒じゃよ」

「……………着いたのか？」

浮遊感が無くなり真つ白だった景色に形と色が付く。
其処は森だった。

「ひよつとしてグルダの森か？」

確証はないものの何となく見覚えがある。
暫く歩くとやはり見覚えのある風景が現れた。

「どうやら戻つたみたいだ」

ルサカの街が其処にはあった。

「さて、どうしたものか…」

ルサカの街に入った誠治は考え込む。

ルケアへの言い訳である。

一応幾つかは考えたのだがどれもしっくりこない。

誠治はいっそのこと本当の事を言ってみようかと思った。ルケアな

ら意外とアツサリ受け入れるかもしれない。
が、まだ早い気もする。

勿論何時かは言うつもりだがもう少し時間が欲しい。
トントン。

「はい？」

道の真ん中であれやこれやと考えていると、不意に肩を叩かれ振り
向く。

「くらえー!!」

「ぐばっ!!」

突然喉に衝撃を受け誠治はぶっ飛ばされる。

「ぐほっ!!ごほっ!!何が……………」

どうやら肘で喉を叩かれらしく咳き込みながらその人物を見て誠治
は固まった。

其処には仁王立ちで誠治を睨むルケアが居た。

本来身体の小さいルケアが誠治にはとんでもなく大きく見える。

「随分と良いご身分ねセイジ」

「えーあーその……………」

いきなり現れたルケアに用意していた筈の言葉が出ない誠治。

「一晩だけならいざ知らず2日も『お泊まり』なんて。あなた何処
の貴族様？」

(「う、怖い…」)

誠治は言いようのない恐怖に身を震わせる。

元の世界でヤクザに因縁つけられても、熊等の猛獣と相對してもこ

これまでの恐怖は感じた事はなかった。

「いくら……その……溜まってたからって何も言わないで居なくなるのは酷いじゃない」

「？姉さん何の話を……」

怒気が薄ろいだと思いきや、モジモジし出すルケアに誠治は首を傾げる。

「今度は……その……私に言いなさい！！良いわね!？」

「話が全く見えないんだけど……」

「返事は!!!」

「はい!!!了解です!!!!」

有無を言わさないルケアの迫力に背を正し敬礼する誠治。

「ミュー八にどんな下着が良いか聞かなきゃ……」

何やらブツブツ呟くルケア。

「どんな勘違いを……まあいいか」

何が何やら解らない誠治だったがこれ以上追及されなくなり助かったと胸をなで下ろした。

22話 手紙

チュンチュン。

「うん？」

窓に一羽の小鳥が顔を覗かせる。

嘴に付けられた紙を解き内容を読む。

「いよいよですか……………グアマンテ居ますか？」

「此処に」

浮かぶ上がるように現れる人影。

「迎えに行つて貰えますか」

「畏まりました」

今度は霧のよつに消える人影。

「さて、どんな子でしょうか」

ファマル王国の北部に位置する王都ベルシー。

過去何度も起きた戦乱により幾度もベルシーは多大な被害を受けて来た。

だが戦乱も終わり整備された街並みは大陸有数の美しさを誇っている。

「此処に来るのは何年振りかなあ」

「そんなに久し振りなのか？」

「ええ。4、5年位振り」

誠治とルケアはベルシーに来ていた。

ルサカから徒歩で一週間。途中幾つかの村や町に立ち寄りながら到着した。

ベルシーに来た理由はクリアベルの手紙を彼女の祖母であるマリアベルに渡す事。

ルケアにその事は言えないので単に王都を見たいと言ったのだ。

ルケアは誠治の事を田舎から来たと思っっているので、「じゃあ一度は王都に行かなきゃ」と案外スンナリ決まった。

「どうセイジ？凄いでしょ」

「ああ正直感動してるよ」

自分の事のように自慢するルケアに街並みに見とれる誠治。

煉瓦の建物が定規で引いたように並び、先には街全体を見下ろすようにある白亜の城。それはまるで映画のワンシーンのような光景だった。

「これからどうするセイジ？」

「まずはギルドに寄ってそれから……」
手紙を渡すと心中で言った後ある事に気づき冷や汗が背中を伝う。

「姉さん一つ聞きたいんだけど……」

「何？」

「マリアベル様に会えたり出来る？」

「はあ？出来る訳ないでしょう」

何言ってるんだコイツ的な視線を誠治に向けるルケア。

「今は政務から外れてるといえ、嘗てあの英雄ジユウセイと共に世界を救った方よ？しかも王族。会える訳ないじゃない」

「ですよねー」

(そうだよ会える訳ないじゃないか！？少し考えれば解るのに)
自分の間抜け具合に頭を抱える誠治。

「……………ちよつと待てよ？姉さんギルドに急ごう!!」

「え？ちよつと何!？」

ある事に気づいた誠治はルケアの手を引っ張りギルドへ向かった。

「んふふ〜このお菓子絶品」
夕暮れになり宿を取った誠治とルケア。
別々の部屋を取った筈なのにルケアは誠治の部屋に居座り街で買った菓子を広げ堪能していた。

「此処に来たらこれが楽しみなのよねえ」
ルサカには少ない菓子店が此処ベルシーには数多くある。
勿論そうなる種類も多くルケアにとっては嬉しくて仕方なかった。

「……………」
しかしそんなルケアとは対照的に誠治は黙ったままある事を考えていた。

あの時気づいた事、それはクリアベルの事だった。
クリアベルは一週間以上前からあっちの世界に居る。

仮にも一国の王女であるクリアベルがそんな期間行方が知れなかったら騒動になっている筈である。

なのにベルシーに来る道中でも、着いてからギルドに行きそれとなく聞いてみてもクリアベルがどうかの話が全く無く噂まで聞かないのは違和感がある。

ひょっとしたら王国が秘密裏にクリアベルの情報を隠している可能性がある。

そうなると手紙をマリアベルに渡すのはかなりの危険があると見ていい。

誠治は英雄の孫。

本来ならマリアベルに会う事は出来る。

だがそれを言ってしまうととんでもない騒ぎになるのは明白で下手をすれば王国に取り込まれるかも知れない。

しかしその前に誠治が清十郎の孫だと証明する手段が何もない。

「渡すの辞めようかな」

誠治はクリアベルから渡された手紙を見ながらポツリと呟いた。

トントン。

「はい」

ノックされルケアが出ようと扉に近づく。

「待つて姉さん」

「セイジ？」

ルケアを手で制する誠治。

扉を凝視する誠治。

その気配は妙な物だった。

其処に何か居る事は居る。

だが人とも動物とも何となく違う。

そんな得体の知れない物に誠治は警戒する。

「開いてますからどうぞ」

誠治は背にルケアを庇い油断無く身構える。

返事は無いが扉が開く。

其処に居たのは白髪の男。

背は誠治より低く、ルケアより少し高い。見た目60歳位で首から下を黒いマントで覆っている。

誠治はその男に見覚えがあった。

「ご同行して戴いてもよろしいでしょうか？」
男は表情一つ代えず言った。

23話 マリアベル

誠治とルケアは先に行く男の後を付いて行っている。月の明かりだけを頼りに闇夜を進む。

宿屋を訪ね、今二人を先導する男はグアマンテと名乗った。

誠治はグアマンテに見覚えがあった。

ゴールディングルを採取に行った時、ルケアを傷つけたバンパイアのジエスメリンに怒り叩き伏せた後現れ誠治の名字ヤマガミを知っていた人物。

それがグアマンテだった。

そのグアマンテが付いて来て欲しいと言ってきた。

本来なら拒否する。

しかしグアマンテには有無を言わさない迫力があつた。

誠治が戦っても勝てるかどうか解らない程の実力を持っているのは確実。しかも誠治一人なら何とかなつてもルケアがいる以上庇いながら戦える相手でもなかつた。

結果仕方なく同意する事になり現在移動中なのである。

「大丈夫姉さん？」

グアマンテの移動速度は早い。

誠治は問題ないがルケアには少々キツイペースと言える。

「何て事ないわよ」

息は乱れているがまだ余裕はありそう。

「それよりあの人誰？見るからに怪しいんだけど」

「姉さんは残っても良かったんだよ？」

「い・や・よ。あなた一人だと危なかつしいの」

（姉さんに言われるとはな…）

誠治は苦笑いする。

本当は無理矢理にでもルケアを宿に残して行きたかった誠治だったが、彼女が素直に了承する筈はなく渋々一緒に行く事になった。

「でも何処に行く気かしら？」

誠治はルケアの言葉に答えず前を見据える。

このタイミングで接触して来たとなれば十中八九クリアベル絡みだと誠治は判断していた。

（恐らく相手は……………）

誠治の視界に月明かりに照らされた白亜の城が映った。

到着したのは城だった。

ルケアはかなり驚いていたがある程度予測していた誠治は冷静に辺りを伺う。

今居るのは城を囲う塀の前。

「此方です」

グアマンテが案内したのは門の前。

彼が二回手を叩くと音も無く門は開く。
中に入ると庭のようで色鮮やかな花が並び噴水に流れる水の音だけがする。

(静か過ぎる……………)

今は深夜とは言え見張りの兵さえ居ないのは不自然だった。

「セイジ……………」

その異様な雰囲気になつたルケアはセイジの裾をギュツと掴む。

「大丈夫」

セイジはルケアに向かい頷いた。

城の中へ入り暫く進むと重厚な造りの扉の前でグアマンテは立ち止まる。

「お連れしました」

「どうぞ」

女性の声で返事があつた後、グアマンテは扉を開け誠治とルケアを中へ誘う。

「え!？」

思わず声を上げてしまうルケアに無言でその女性を見る誠治。
ルケアはその女性を見た事があり誠治は初対面だが予想はついた。

「呼びつけてゴメンなさい。山上 誠治君よね?初めまして私はマリアベル」

「はい山上 誠治です。祖父がお世話になったみたいで」

「ふふふ…それはお互い様よ」

「え?え?」

気軽に話しかけてくるマリアベルに混乱して彼女と誠治を交互に見るルケア。

(聞いた話からすると爺とそんなに歳は変わらない筈なんだが…)
中身は別だが清十郎の見た目は年相応なのだが目の前のマリアベルはかなり若く見える。

白く張りのある肌に艶のある金髪。蒼い瞳は美しい。クリアベルを
思わせるその容姿はとて老女とは思えない。

(でも大丈夫そうだな)

まだ緊張はしている誠治だがマリアベルの様子を見てみると歓迎してくれているようでホッとする。

「手紙を」

誠治はクリアベルから託された手紙をマリアベルに渡す。

「ありがとう。……………全くあの子は……………」

その場で手紙を読み出したマリアベルは呆れたようにため息を吐く。

「あなたには随分迷惑をかけたみたいね」

「ははは…」

本当だけに笑って誤魔化すしかなかった。

「それじゃあ…」

マリABELは魔法球を取り出す。

「開け」

マリABELの言葉が引き金となり魔法球から紫色の煙が出現する。

「え？……………」

「ふにゃ……………」

その煙を吸い込んだ誠治とルケアは倒れてしまい寝息を立てる。

「グアマンテ後は頼みましたよ。私は少し出掛けて来ます」

「畏まりました」

「此処は何処なのかしら？」

目を覚ました誠治とルケアはある場所に居た。

「まあ見たまんまじゃないかな」
岩が剥き出しの壁に床。そして鉄格子。
牢屋だった。

「セイジ、正座しなさい」

「え…何でまた……」

「いいから早く…!」

「はい…!」

素早く正座をする誠治。

床がゴツゴツしているため中々痛い。

「あなた何したの？そもそもマリアベル様と、どんな知り合いなの？」

「え…何と言いましょうか、俺が居なくなる前にクリアベルさんに会いまして」

「クリアベル様と!？」

「近くに魔物が出たからと手伝わされて、その後にマリアベル様到手紙を渡してくれと頼まれて…」

誠治は我ながら無理矢理な嘘だと呆れた。

一介の冒険者である誠治が一国の王女のクリアベルと一緒に魔物を討伐する訳がない。さらに手紙を頼まれるなど有り得ない話。

普通なら信じない。
だが。

「ゴメンセイジ！！私勘違いしてたわ！！」
基本人を疑わないルケアなら信じる。

「てつきり婦館に入り浸っているものと思ってたの…」

「おいおい、なんちゅう勘違いを…」

「でも違ってた！？セイジは綺麗なままなのね！？」

「綺麗かどうかは解らんけど………それより姉さん今はそんな事言ってる場合じゃないだろ？」

「あつそうか……でも何でマリABEL様はこんな事したんだろ？手紙に何か書いてあったのかな……セイジ解る？」

「いやサツパリだ」

それに関して本当に分けが解らなかつた。

寸前までマリABELの様子は可笑しく無く寧ろ友好的なものだった。

手紙にマリABELの機嫌を損なう様な事が書かれていた可能性はないとは言えない。ならあの魔法球は？

マリABELの使った魔法球には恐らく『眠り』の魔法が込められていたのだろう。

それをとっさに使ったにしては都合が良すぎる。

では予め用意していた？

わざわざ誠治達に使う為に？

「はあ〜」

ルケアはうなだれるように座り込む。

誠治は取り敢えず考えるのを止める。
まずはこれからどうするかを決める事にする。
誠治は鉄格子の側まで来て、掴み揺すってみる。
多少ギシギシしており鉄格子自体もそれほど強度は良くなさそう。
これなら誠治が氣で身体能力を上げれば破壊出来るかも知れない。
しかし問題はその後。
牢屋を脱出したとなればお尋ね者にされてしまう。
それは拙い。

「何してるのセイジ？」
誠治は背負っているバッグから清十郎から渡された黒い本を取り出す。
幸いにも荷物は取り上げられていなかった。

「ここから出る為の準備だよ」
本を捲り描かれている図を床に書き出す。
まずは此処から元の世界に戻る。
クリアベルはまだ居るはずなので今度は一緒にこの世界へ来てマリ
アベルを説得して貰う。
流石にクリアベルと一緒に居ればこんな事にはならない筈だ。
戻るの早い気もする誠治だがこの際仕方無しと自分を納得させる。
ただそうすると勿論ルケアを此処に置いて行く訳にはいかず一緒に
元の世界に戻る事になる

「姉さんこっちに来て」

「う、うん」

数時間後、描き終わった誠治はルケアと図の中心に移動する。

「ねえセイジ…」

「後で説明するよ姉さん」

不安そうなルケアの手をしっかりと握る。

図から二人を包み込むように光が溢れ出す。

「わ！？わ！？」

「落ち着いて姉さん」

「きゃ！？」

戸惑うルケアをしっかりと抱きしめる誠治。

「俺を信じて」

「う、うん」

光は閃光のように強くなる。

そしてそこに二人姿はなかった。

閑話 戦姫の修行と飛鳥の昔話

シンと静まり返った道場内。

真新しい胴着に身を包んだクリアベルが座禅を組んでいる。

「もうよいぞ」

清十郎の声に目を開けるクリアベル。

「この短期間でここまで精神を安定させたのは見事じゃ。誠治の奴よりもセンスがあるのう」

「これで先に進ませてくれるのだろうか？」

「ふむ。では次の段階じゃな」

清十郎は道場の壁に掛けてある木刀を手に取る。

「以前これで鉄を斬ったが無論このままでは斬れん。嬢ちゃんよ『氣』を知っておるかの？」

「……いや。知らない」

「では『魔力』は？」

「知っている。寧ろ私達の世界で知らない者は居ない」

「『氣』と『魔力』は同じ物じゃ、言い方が違うだけでの」

「それがどうかしたのか？」

中々進まない話に苛ついてくる。

「ほっほっほっ、また乱れておるぞ」

「くっ……」

クリアベルは一回二回と深呼吸をして落ち着く。

「慌てるでないで。要は『氣』でこの木刀を強化して鉄を斬っただけなのじゃ」

「そんな事が出来るのか!？」

クリアベルの居た世界では考えられない事だった。

魔力は誰にでもある。しかしそれを魔法という形で具現化できるのはほんの極僅かな者だけ。

精々魔法球を使う時だけに魔力は必要なのが常識。

「其方の世界じゃと『魔法』という存在があるから他の使用法が思いつかなかったのじゃろう」

「しかしお前のした話だとお婆様は……」

「そうじゃ。クリアベルは既に『魔力』を『魔法』としてではなく『強化』として使っておった。まさに天才じゃの」

「お婆様が……」

改めてクリアベルはクリアベルの凄さに感嘆した。

「さてそのやり方じゃが、まず『氣』の流れを感じる所からじゃの」

清十郎は再びクリアベルに座禅を組ませる。

「体の中を何かが流れているのを感じんか？」

「……………これか」

クリアベルは何かを感じ取る、体中を駆け巡る力を。

「これを持つんじゃない」

清十郎は木刀を渡しクリアベルを立たせる。

「木刀を体の一部と認識して『氣』を流すんじゃない」
清十郎の言葉から氣を木刀に流そうとする。

「うっ……………く……………」

だがまるで木刀が中の詰まったホースのように感じ上手くないかない。

「まだ木刀を異物と捉えておるぞ。自分の腕の延長と信じ込むんじゃない」

「ぐ……………くっ」

すると徐々に氣が木刀に流れて行く。

しかし、

「かはっ……………」

視界がぐらりと揺れ片膝をつくクリアベル。

「今日はここまでじゃな」

「ま……………だやね……………」

何とか立ち上がるうとするクリアベルだが、体が言うことを利かない。

「無理をするでないで。『氣』というのは言わば生命力じゃからな、死んでしまつぞ」

「不甲……斐……ない……」

そのままクリアベルは気を失った。

「ふう……」

湯船に浸かり息を吐く。

気がつけば客間で寝かされていたクリアベル。

何とか体は動くようになっていたので現在風呂に入っている。

あちらの世界でも風呂はあるが緩いのが主流で、この世界の熱い風呂をクリアベルは気に入っていた。

「あれしきの事で倒れるとは……」

どんな厳しい訓練でも音を上げずこなすクリアベルにとって今日の氣の修行で気を失った事はショックだった。

「こんな事では何時まで経ってもお婆様に認められない……」
悔しさに唇を噛み締める。

「そんな事ありませんよ」

「慰めなど……………」

いつの間にか湯船に浸かっている飛鳥と目が合う。

「うわ！？お前何してる！！」

「鍛錬で汗を掻いたのでお風呂に入ろうかと」

「私が入っているだろう！？」

「ついでに親睦を深めようと思ひまして」

「お前まさかあっちの気もあるのか？」

立ち上がり身体を隠しながら少し後退するクリアベル。

「『も』と言うのが気になりますが、私が愛するのはお兄様だけです。それとも同性の私と一緒に風呂に入るのはお嫌いですか？」

「い、いやそんな事は…」

そこまで言われては断る事も出来ず再び湯船に沈む。

「実際クリアベルさんは凄いですよ。お兄様があの修行を初めてした後は3日間眠ったままでしたから」

「あんな奴と一緒にするな……………ひっ！？」

「私なしでは居られない身体にして差し上げましょうか？」
黒いオーラを纏う飛鳥にクリアベルは必死に首を横に振る。

「い、今のは失言だった取り消す！！」

「解りました。気を付けて下さいね」

元の雰囲気に戻った飛鳥にホッとするクリアベル。

「しかしお前本当に自分の兄の事が好きなのだな」

「勿論です。でも昔は逆でしたが」

「逆…と言うことは嫌いだったと?」

「ええ。こう言ってはなんです。昔のお兄様はヘタレで意気地無しで弱虫でしたから」

「何気に酷い事言うなお前」

「でも…」

飛鳥は天井を見つめる。

「クリアベルさん、例えばあなたの周りの誰かが本来見えない何かが見えると言いだしたらどうします?」

「む、そうだな……それがどういった能力かは解らないが使えるなら兵として雇うのもありだな」

「流星剣と魔法の世界の方ですね」

飛鳥はクスリと笑う。

「でもこの世界の普通の人は自分達と違う人間を輪から弾くんです」

「……………」

「私が8歳の頃、それが見えだしたんです」

「それとは？」

「幽霊とかお化けとかの類です。最初はみんな笑っていたんですがそのうち避けるようになって行きました」

「何と器量の狭い連中だ！」

憤りクリアベルは口調を荒げる。

「人とはそんな物です」

飛鳥は淡々と言う。

「そして私が皆からそんな扱いを受けているのをお兄様に知られました。お兄様は心配してくれました、でも私は別に気にしてないと突っぱねたのです」

ピチャンと天井の水滴が湯船に落ちる。

「そしたら途端にお兄様は怒り出して『自分を隠すな！！』どんなお前でも俺は妹を見捨てない！！』と言って下さったんです」

「それで兄を好きになったのか」

「それだけではないのですが切欠はそれですね」

「しかし奴がそんな事を言う様には見えんがな」

「お兄様は自分では冷静で薄情な人間だと思っっているようなんですが本当は真逆なんです。本人は無自覚ですが」

「何故その話を私に？」

「さあ何ででしょう。さて、そろそろお背中を流しましょうか？」

「待て！？それはいいが何だその卑猥な手つきは！！」

「何だとは随分ですね」

「やっぱりそっちの気があるんじゃないのか！？」

「ありませんよ。ただこれから目覚めないとは保証出来ません」

「止めんか！！近寄るな！！」

「まあまあ良いではないですか」

その後、風呂から上がったクリアベルは何故かグッタリとしていた
そうなの。

24話 転移先は？

「……………また森か」

光が収まりと其処は鬱蒼と木々が生い茂る場所だった。

(道場の近くじゃない?)

周りの光景に見覚えが無い誠治は首を捻る。

(面倒だな…携帯を持ってれば良かったな)

携帯があればGPSで場所を確認出来たのだが無い物の事を言ってもしょうがないと誠治は頭を振る。

「姉さん大丈夫か？着いたよ」

「……………へ？何？」

牢屋から一転、森に移動した事に啞然とするルケア。

「取り敢えず歩こうか」

「う、うん」

此処が何処か解らない以上ジツとしていてもしょうがないため歩き出す二人。

草木を掻き分け進んで行くと獣の鳴き声が森に鳴り響く。

「狼?……………いや野犬かな？」

犬系の鳴き声のように感じた誠治は呑気に辺りを見渡す。

「セイジぼさつとしないで!」

対照的に厳しい叱咤を飛ばすルケア。

「姉さん何をそんなに？」

異世界の魔物と何度も戦っている誠治にしてみれば元の世界の野生動物はあまり脅威ではない。

しかし姿を見せた生き物に誠治は卒倒しかけた。

灰色の毛並みの狼に似た生き物が二匹。

ただ決定的に違うのは頭が2つある事だった。

「ダブルヘッドウルフ……………」

ルケアは油断無く弓を構える。

「おいおいまさか……………」

「来るわよセイジ!!」

動揺しまる誠治だったが何とかダブルヘッドウルフを倒す事に意識を切り替える。

ダブルヘッドウルフ自体はさほど強い魔物ではなく、ルケアの弓矢で牽制しながら問題なく誠治が倒す事に成功した。

「ダブルヘッドウルフが居るって事は此処はグルダの森じゃないって事ね」

「姉さんの予想だと此処は何処？」

恐る恐る聞く誠治。

「そうね……………ベルシーに近くてダブルヘッドウルフの生息する森っていったらラルバかな」

「因みに場所と言うとどこら辺なのでしょう？」
段々と声が小さくなる誠治。

「え〜と確か……………プリージユの北東だったかな？」

「そ、そんな……………」

両手両膝を地面に付けガツクリとする誠治。

（何で元の世界に戻ってないんだ！？何か不具合があったのか！？
書き間違えたのか！？）

「でも何でこんな所に……………あつ！セイジ、牢屋に居た時に見てた
黒い本があったでしょ？あれ見せて！！」何か思い出したのか未
だうなだれている誠治のバッグから勝手に黒い本を取り出しペラペ
ラと捲り出す。

「やっぱりこれ『転移陣』だわ」

「転移陣？」

ルケアの声に我に返った誠治が聞く。

「『転移陣』はその名の通り転移する事が出来る物なの、前に一度
見た事があったね。よく持ってたわねセイジ、これ無茶苦茶高いの
よ？」

「……………爺」

「？」

「あんの糞爺いー！！」

「へう！？」

「ふざけやがってあの野郎お！！今度は何だ！！何を企んでやがる！！」

あまりの怒りにそこらの大木に八つ当たりの拳を見舞う。
あつという間に辺りは酷い有り様となる。

「よ、よく分かんないけど落ち着いて。ね、セイジ」

「はあはあはあ……」

「ほら良い子良い子して上げるから」
良い歳して頭を撫でられる誠治だった。

25話 現状確認(前書き)

25話が短いので26話と一緒に投稿します。

25話 現状確認

森を出て数時間。

街を見つけた誠治とルケアは食堂に入り一息ついていた。

「まず状況を整理しましょうか」

ルケアはグイツと果実水を飲み干し、誠治は黙って頷く。

「マリアベル様に会ったら眠らされて起きたら牢屋の中。セイジの持ってた『転移陣』で脱出。で、現在地はプリージユのギトラクって街」

「文字数にすると少ないな…」

「そうね……」

二人して気を落とす。

「ゴメンな姉さん」

「ん？」

「自分でも何でこんな事になったのか解らないけど、姉さんを巻き込んだ形になってしまっただけなら何とかなる自負は誠治にはある。」

こうなったのは予想外の事とは言え、ルケアを巻き込んだ事は事実でそれが誠治には申し訳なかった。

「何言ってるの、パーティーってのは一蓮托生なのよ？こんな事ぐ

らいどうつて事ないわよ」

「ん……そうだな、ありがとう姉さん」

笑って話すルケアに誠治はもう謝るのを止めた。これ以上謝るのはルケアの心遣いを無駄にしてしまうから。

「しかし心配なのは追っ手だな……」

仮にも城（恐らく）の牢屋から脱走したのであれば追っ手が二人を捕らえに来てても可笑しくない。

「多分それはないと思う」

しかしルケアがそれを否定する。

「このプリージユを含む近隣五つの国は和平を結んでるけど、みんながみんな仲が良い訳じゃないの。特にプリージユとファマルの仲が悪いのは周知の事実でね、犯罪者の追跡は余程でないと出来ないの」

「じゃあ俺らは『余程』でないと？」

「うーん……」

二人して悩む。

マリABELという王族に拘束され牢屋に収監。そして脱走。中々微妙だった。

「ま、まあ何にしても多分ファマルには帰れない訳だしほとぼりが冷めるまで旅でもしてましょ」

「そうなるよな。んじゃどうする？」

「取り敢えずギルドで情報を……………」
立ち上がったルケアが自分の着ているローブを弄る。

「どうした姉さん？」

「……………財布忘れた」

顔を真っ青にして言うルケア。

「……………はああ！？何処に！？」

「多分……………」

ルケア曰わく城に向かう時、宿に置き忘れたらしい。

「何てこつた…」

実は誠治のお金もルケアに預けていた。
ルケアがお金の管理は自分に任せると、余りにも自信満々に言うの
で預ける事にしたのだ。

忘れていたがルケアは基本雑な性格だった。
最近はその中でも無かった為誠治は油断していた。

「何にしてもまずは路銀を稼がなきゃな」

「いいえ。その前にやる事があるわ」

「と、言うこと？」

「この支払いよ」

誠治とルケアは必死で荷物からお金を探し始めた。

26話 先立つ物

何とか食堂の支払いを済ます事が出来た誠治とルケアはギルドに来ていた。

「そう言えばギルドって国が違う場合どうなるんだ？」

「一緒よ。だから登録のし直しをする必要ないの」

「って事はファマルのギルドからプリージュのギルドに俺達を捉える依頼が来てるかもしれない？」

「それはないわ」
「キツパリと言い放つ。」

「王国とギルドは無関係で、それどころかお互い嫌ってるの。王族は城で起こった事をギルドに依頼するどころか知られる事も嫌うから」

「なら安心か？」

「まあね。王族の人が別の人物を介して依頼する事はあるかも知れないけど、それがバレたら余計恥だから」
「国とギルドは表向き全く関与していない。」
「ギルドを創設した人物が国を嫌っていたという話はあるが真意は謎である。」

「ナナが心配するから手紙を出したいんだけど…」

「それすら出す金がないもんなあ……」
ギルドでは手紙の配達も行っている。

場所が曖昧な相手に出す場合は別途冒険者に依頼しなければなら
ないが、それ以外なら通常に頼める。
料金は単純に距離となる。

此処、プリージュのギトラクからファマルのルサカまでなら200
0キュエルになる。

が、今の二人にはそれを払えない所か今日幾らか稼がなければ泊ま
る事も何も食べる事も出来ない。
所謂一文無しなのだ。

「うーん。めぼしい依頼がないわねえ」

ルケアは壁に張られている依頼書を見てため息を吐く。

時刻は既に昼を過ぎもう直ぐ夕方になるうとしていて、為かめぼしい
依頼は既に無くなっていった。

「姉さんは蜥蜴とか蛇とか食べれる？」

「…何の話？」

「このままだと野宿だろ？なら今の内に食料の調達をしとこうかな
と」

「絶つっつ対に嫌！！安くても良いから依頼を請けるわよ！！」

と、言うものの今の時刻では今日中に完遂出来る依頼が見当たらな
い。

「仕事をお探しですか？」
依頼書を血眼で見ているルケアと野宿場所を確保しに行きかけた誠治の二人に掛けられる声。
其処に居たのは一人の少女。ルケアより少し高い背、幼い顔立ちに灰色のショートカット。黒縁の眼鏡が浮いている。
紺色のローブを首から下を被った姿は照る照る坊主にも見える。

「もし宜しければ私の依頼を請けて欲しいのですが」

「その依頼請け……」

「待てコラ」

即決しようとするルケアの口を抑える誠治。

「ふぁにふんほよ（何するのよ）！？」

「アンタは反省の意味を知らんのか！？」

「ふぁーほおだったほおめんほおめん（あーそうだったゴメンゴメン）」

以前独断で依頼を請け厄介な目にあつた時、誠治に今後は絶対自分一人で判断するなど言われていたのを思い出したルケア。

「あの？」

状況が飲み込めずカクンと首を傾げる少女。

「えっとすみません、どんな依頼か説明して貰えますか？」
ルケアを解放し少女に説明を促す。

「私はセレン。遺跡調査の際の護衛を頼みたい。期間は凡そ3日、報酬は20万キュエルで」

「何故ギルドじゃなく直接依頼を？それに俺達のランクはDなんだから大丈夫か？」

誠治は疑問に思った事を聞く。

「出来れば明日の早朝から出発したい。今からギルドに依頼を申請しても掲示されるのは明日の昼過ぎと言われた。ランクはDで問題ないとギルドで判断された」
「淡々と無表情で答えるセレン。」

「うむ……………」

誠治は頭の中で今の話を反芻する。

依頼の内容自体は問題なく報酬の20万キュエルが若干高めなのが少し気になるがギルドがDランクと判断したなら大丈夫だろうと誠治は思う。

隣のルケアを見やると頷いた事からルケアも問題ないと判断したのだろう。

「解りました。正し一つ条件があります」

「何？」

「半額…………いやせめて一割でも依頼料の前払いをお願いします!!」

「まともな料理と普通のベッドで寝たいんです!!お願いします!!」

誠治とルケアは二人して頭を下げた。

27話 遺跡調査へ

次の日の早朝。

セレン、誠治、ルケアの三人はギトラクからラルバの森に来ていた。

「どの位の時間が掛かるんだ？」
先頭に行くセレンに誠治が聞く。

「夜は野宿するとして遺跡に到着するのは明日の朝」

「ううう…結局野宿するのかあ」

昨夜は依頼料の前借りが出来た為ルケア達はまともな食事とベッドで寝る事が出来た。

「野宿ぐらいするだろう？」

「するけどやっぱりやなの。ご飯は美味しくないし地面だと体が痛くて良く寝れないし…」

と言うが実際何度か一緒に野宿している誠治から見れば、食事は残さないし何時も熟睡していたりする。

口に出したりはしないが。

「しかし結構奥まで行くんだな、強い魔物は出ないのか？」

「昼間は出ない。でも日が落ちると強いのが出る」

「え！？野宿するの拙いんじゃないそれ」

「大丈夫、野宿する場所には魔物が寄り付かない細工がしてあるか

ら

三人は黙々と進んで行く。

先頭をセレンが行き真ん中がルケア。後方を誠治が続く。

本来なら雇い主であるセレンが真ん中なのだが、彼女しか道を知らない為この様な隊列になっている。

(に、しても…)

歩き始め4時間程。

誠治はまだまだ余裕だがルケアが少し疲労している。

ルケアは外見から体力が無いように見られるが実はそこそこタフなのだ。そのルケアに疲れた様子が見られるという事は少しペースが速いと見ていい。

なのに先頭に行くセレンは全く変わらない様子で歩いている。

その上誠治が話しかけても口調に変わりがない。

(本当にこの世界は見かけでは解らないな)

「止まって」

不意にセレンが歩みを止める。

するとしゃがみ込みナイフを取り出して枯れた木を抉りだす。

「どうしたんだ？」

「食料調達」

「何かあるの？」

「これ」

セレンが差し出した手をルケアが興味津々に覗き込む。

そこにはウネウネと蠢く芋虫が三匹。

「き…きやあああー!!」

森に響く悲鳴を上げ後ずさるルケア。

「そ、そんな物捨てなさいよお!!」

「貴重な栄養源。それに炙ると美味しい」

「そつだぞ姉さん。見てくれはあれだけど」

地球でも場所によっては食べられているし誠治自身も何度か食べている。

中学生の頃よく清十郎に見知らぬ山中に置き去りにされており、その時に食べていた。

人は空腹になると大概の物は大丈夫だと誠治は悟った。

「私は自分のがあるからいらないわよ!？」

「そつ」

気分を害した様子も無くセレンは芋虫を袋に入れるとまた歩きだした。

「ほら姉さん行くぞ」

「うっまだ鳥肌が…」

「これなら食べれる?」

セレンが再び差し出した手にはムカデのような生き物がカサカサと動いている。

「食感が良い」

「もういやぁー!」

闇に包まれた森。

夜になる前に野宿の場所に到着した三人は洞穴の中にいた。

「此処が？」

「元々此処は竜の住む場所だった。だから大抵の魔物は近付かない」
種類にもよるが竜は魔物の頂点にいる生物。

強さに敏感な魔物は竜自体が居なくてもその場所には近付かない。

「後はこれ」

セレンは袋から透明な球体を取り出し洞穴の前に置く。

「『起動』」

セレンの言葉と共に球体が輝き出す。

「それ魔法球？」

「『幻惑』の魔法球。これで一晩外からは洞穴は見えない」

「なる程な、これで魔物と人から襲われる事はないと
コクンと頷くセレン。」

食事を終えた三人（芋虫やムカデをムシヤムシヤ食べるセレンをルケアは一切見ないようにした）は焚き火の前で微睡んでいた。
セレンの話からすれば余程の事で無い限り、この洞穴に侵入する魔物や人は居ないらしいのだが誠治は一応警戒の為寝ずの番をする予定だ。

すっかりルケアは寝息を立てている。

「セレンは普段何をしてるんだ？」

本を読んでいるセレンに声をかける。

この少女は無表情で一見素っ気なく見えるが聞けばちゃんと答えてくれる。

「学者の見習い」

「へえ〜じゃあさ、俺達初めてプリージュに来ただけど此処がどんな国か教えてくれるか？」

セレンはコクンと頷くと本を仕舞う。

「プリージュは別名『賢者』の国と呼ばれている」

「なんでまた？」

「それは英雄ジユウセイの従者を務めた五人の姫から取っている。あなたはどの国から来たの？」

「ファマルから」

「ファマルは『氷刃』と言われた剣の使い手、マリアベル様から『剣』の国と呼ばれている」

「はあくそうか…」

誠治は会った時のマリアベルを思い出しゾツとする。

「プリージュは『策略』と言われたキシシリ・オーバムから」

「策略ねえ…」

「英雄達の行動や計画は全て彼女が考えた」
誠治は聞きながら焚き火に木をくべる。

「それは国の方針にも出る。『剣』の国であるファマルは軍事に力が入れられ、『賢者』の国のプリージュは学業が中心になっている」

「そういやファマルとプリージュの仲が悪いって聞いたんだけど？」

「英雄の従者をしていた頃のマリアベル様とキシシリの仲が悪かったから」

「それだけ？」

「それだけ」

「なんだそりゃ……」

誠治は呆れて仰向けになる。

「人は感情があつて思考する。そんな人が人と付き合つて行けば好き嫌いは出る。それには立場も関係ない」

「……因みにセレンさんは俺と姉さんの事はどう思ってます？」

「少し好き」

「それはありがたいよ」

結局朝までセレンと誠治は語り合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713w/>

英雄の後始末

2011年12月13日11時39分発行